

国際仏教学大学院大学研究紀要
第 9 号 (平成17年)

Journal of the International College
for Postgraduate Buddhist Studies
Vol. IX, 2005

古代インドの女性観 (4)

原 實

古代インドの女性観 (4)

原 實

これ迄、三回に亘って古代インドの女性観の諸側面を論じて来たが、今回はこの Project の最終回に当って、残余の若干の問題を3章に亘って邦訳を通して見る事とした。その第一は疑惑を持たれた貞女の純潔の証明、第二は貞女の功德の中から彼女の前世想起力、そして最後に生育の由来を説く奇想天外な物語を紹介する。今回も又前回同様、今年度本学の演習に於いて学生諸君と共に読み進んだ所を提示するもので、この機会に演習に参加された諸君の熱意に感謝する。

1. 貞操の証明 (Sītā Yaśodharā)

(I-1) Sītā

これ迄論じて来た「女性の貞操」が疑惑の対象となった時、古代インドの女性はこれに対してどの様に対処したであろうか。その様な場合に貞女がどのようにして身の潔白を証明したのであるか、その経緯を示す為、以下に叙事詩ラーマヤナの第六巻に見える有名な貞女シーターの貞操立証物語を紹介する。

周知の通り、夫の留守中に Rāvaṇa により不本意にも誘拐されて Laṅkā 島に幽閉された Sītā は、夫 Rāma の奪回作戦によって彼の手に戻ったが、Rāma は彼女の貞節を人民の前で証明すべく、敢えて彼女の貞操を疑って辛辣な言葉をかける。彼女は満座の中で、思いもよらぬ夫の暴言に恐れ戦き、身の潔白を主張するが、さりとて彼等を納得せしめるに足る証拠を提示する事が出来ない。

証人喚問等の人的手段によって立証し得ない場合、他民族に於けると同

様¹、古代インドに在っても神明裁判に拠って神の裁きを受けた。インドの神明裁判は古来 *Divya* と称せられて各種の法典に規定されているが²、通常は秤、火、水、毒の四種を最も代表的なものとしている³。Sītā もこの際「火」、より精確には「火の神」に訴え身の潔白を誓い入火を敢行するが、その過程は後世の法典に規定されるどころ (*vyavahāra-divya*) と必ずしも同一ではない⁴。

以下に記す所は、この久しぶりの夫婦の会見の経緯を物語る *Vālmīki Rāmāyaṇa* 6. 102 を Baroda 批判版に拠って邦訳を試み、以ってその序章となし、そのハッピーエンドに終る所までを検討したものである。多くの異読が存在するが、今回は比較的文意が平明であるので煩瑣を避け、大筋に於いて批判版の読みに従うこととした。異読は注記に翻訳を試みたが、文意は常に必ずしも明瞭でない。

R. 6. 102.

かの猿 (ハヌマーン) は、極めて賢明にして、且つ全ての弓を持つ者の最勝者、

ラーマに近づいて、要点を搔い摘んで (*artha-jña*)、次の様に言った。

(1)

「成功裡に終ったこれらの活動の、そもその原因となった

かのお妃様に是非御引見賜りますよう、ミティラーの王女 (シーター) は憂苦に身を焦がす思いでおられます。

(2)

と申しますのも、憂苦に襲われるまま眼に涙を一杯浮べておられました

が、
ミティラーの王女は陛下の勝利を耳にされて、歓喜されましたから。

¹ Kane, 375-378.

² Kane, 361-375 and Lariviere, 1-53.

³ この四は玄奘の記述に符合を見る。「随問歎对摠事平科。拒違所犯恥過飾非。欲究情実事須案者。凡有四條。水火称毒」大正 51 877b28-c1. Cf. Kane, 376, note 591. 水谷, 68.

⁴ Kane, 364, Lariviere 35.

(3)

以前にお眼にかかっておりましたので、お妃様はすっかり信用して私に申されました。

「目的を成就した夫に、ラクシュマナ共々、是非御眼に掛かりたい」と。

(4)⁵

正義を貴しとなす者の最勝者ラーマはハヌマーンによってこの様に言われると、突然深いもの思いに沈み、その眼は涙に溢れていた。

(5)

長く且つ熱い溜息をついた後、彼は大地を見つめながら、近くに侍っていた、雨雲にも似たヴィビーシャナに次の様に言った。

(6)

「直ちにシーターをここに連れて参れ。美しく化粧し (*divyāngarāga*)、美しい装飾を身につけ、頭を洗ったヴィデーハの王女を」

(7)⁶

ラーマに斯く命令されてヴィビーシャナは急ぎ後宮に入り、自分の侍女達を通して、シーターを促した。

(8)⁷

⁵ 3193*

ヴィデーハの王女は陛下にお会いになるのを望んで私に申されました。

⁶ 3194-5*

気が進まないかの如く、彼はアンジャナーの息子 (ハヌマーン) に言った。

「ランカーの都へ行つて、今一度ヴィビーシャナに伝えよ。

汝は精進潔斎し、シーターを連れて私のもとに参代せよ。

余は衣服も、装飾もきちんとした、非の打ち所のない

本来の姿に於けるヴィデーハの王女に会いたい。

その様な姿、風采のヴィデーハの王女を連れ戻してきてくれ。

汝自ら、彼女を先として戻つて来て貰いたい」 (3194)

と言つて彼はハヌマーンを (ランカーの) 都に向けて出発させ、

名門の家臣を伴い、彼はスヴェーラ山の山頂に留まつて、

猿、大きな身体の熊、ゴーランゲーラ猿達を宥めていた。 (3195)

⁷ 3196-3199*

彼は兄の葬儀を済ませて、義務を果たし、友人に囲まれて

ハヌマーンからシーターを連れ戻すよとの言葉を聞き、

彼は自分の家に戻り、立派な席に着いた。

「ヴィデーハの王女よ、美しくお化粧をして、美しく身を飾って、車にお乗り下さい。

御目出度い事に、御主人様は貴女にお会いになりたいと思っておられます」^{(9)⁸}

斯く言われて、ヴィデーハの王女はヴィビーシャナに次の様に答えた。「羅刹の王よ、私は沐浴せずとも (いち早く) 御主人様に御目に掛かりたい」と。⁽¹⁰⁾

彼女の言葉を聞いて、ヴィビーシャナは次の様に答えた。

「ともかくも御主人様であるラーマの仰せの通りになさいませ」と。⁽¹¹⁾

彼の言葉を聞くと、夫を神と仰ぐミティラーの王女は

夫への愛情をその誓としている貞女として、「畏まりました」と答えた。^{(12)⁹}

それからこの元気な、風神の息子ハヌマーンは

ヴィビーシャナにラーマの言葉を伝えた。(3196)

ヴィンドヤ等の、兄の後宮の監督者達に向かって彼は言った。(3197)

「礼儀正しく慎ましく頭を垂れて、

ヴィデーハの王女に挨拶し、御機嫌を伺ってからお伝えせよ」(3198)

それから、羅刹の王、ヴィビーシャナは福德豊かな

シーターに会見し、頭上に合掌して、恭しく言った。(3199)

⁸ 3200-3202*

「正義を貴しとする人々の中の最たる、御主人様のラーマは

沐浴し、装飾品をつけきちんと身支度した貴方に会いたいと望んでおられます」⁽³²⁰⁰⁾

とこの様に言われた彼等後宮の監督者は、恭しくそのようにした。

ヴィデーハの王女は、この夫の言葉を聞くと、恥しそうな顔をして

一体王様は何をなさるお積りなのだろうと思った。

「というのも、ラグの後裔である王様は装飾品をつけた私に会いたいとの仰せ、

私のかの偉大なお方なして、どうして身支度など出来ようか。

この恐ろしい、不吉な御言葉をどうやって実行したらよいものか」⁽³²⁰¹⁾

この様に苦悩している彼女をどうしたら荘厳出来るのだろう。⁽³²⁰²⁾

⁹ 3203-4*

でも、御主人様の御言葉は、吉であろうと不吉であろうと従わねばならない。

それからシーターは頭を洗い、若い侍女達に荘厳されて、
 壮麗な装飾をつけ、壮麗な衣服を纏った。(13)¹⁰

ヴィビーシャナは彼女を、眼も醒める様な、最高の蓋いに被われた駕籠
 に乗せ、

大勢の羅刹に護衛をさせて、(彼女をラーマの許に) 送り届けた。(14)¹¹
 参内すると、彼は偉大なるラーマが深いもの思いに耽っているのを認め、

その様にしようとの言葉が直ちに私の心の中に芽生えた。

と、この様に決心してヴィデーハの王女は、後宮の監督者達に言った。(3203)

御主人様のお言いつけは、躊躇する事なく実行されねばなりません。

そこで、後宮の監督者達はすべてヴィビーシャナに告げて

ヴィビーシャナの命令によって言われる通りにした。

装飾品や衣服その他、手馴れた彼等年長の婦人達は(彼女の)身支度を始めた。

(3204)

¹⁰ 3205*

ヴィビーシャナの命令により、運搬にたけた羅刹達は、
 宝石や金銀に煌き、四面覆いを施された駕籠に神の娘のような彼女を乗せた。

彼女は盛装して、出掛ける決意をして駕籠に乗った。

ヴィビーシャナは恭しく、年老いた大臣達に囲まれていた。(3205)

¹¹ 3206-8*

すると主立った猿達は好奇心の余り、ヴィデーハの王女を見ようと幾重にも集まって来た。

彼等は、ラーマの命令の促す所、シーターの

起死回生にも等しい参代の事実を知っていたのである。

その他、口やかましい連中も、物見遊山の積りで集まって来た。

彼等はその時、ラーマに対する恐れを全く抱かなかった。

「ヴィデーハの王女シーターは本日唯今お出掛けになる」と好奇心を抱き、

「でも、ラーマは果たして、羅刹の所に永く住んでいた、ヴィデーハの王女に『愛しき妻』と言うのだろうか」と互に噂をしていた。

「着飾ったシーターと会見する理由、又その意図は」と怪訝に思った。

この様な彼等の意向を知ったラグの後裔は、スヴェーラ山の山頂から降りて来た。

すると幾千、幾百の猿達は彼とラクシュマナを取り囲んだ。(3206)

心清く、賢明なヴィビーシャナは盛装して大臣達に囲まれ、歩兵を従えて

この駕籠の後について、ラーマのもとに参上したが、

途中で好奇の眼を見張る人々にもみくちゃにされた。(3207)

すると後宮の監督者達は、杖棒を手にして肅清を始めた。(3208)

恭しくも喜びに満ちて、シーターの到着を告げた。(15)

久しく羅刹の家に住していた彼女の到来を耳にして、
歓喜と憂愁と怒りの三者が、突然ラーマを襲った。(16)

心配そうに側に侍っているヴィビーシャナを見ると、
ラグの後裔ラーマはその心、思案に暮れて、歓喜の相を払拭して、次の
様に言った。(17)

「常に余の勝利を喜ぶ、親愛なる羅刹の王よ、
直ちにヴィデーハの王女を私の許に連れてきてくれ」と。(18)¹²

ヴィビーシャナは、このラグの後裔(ラーマ)の言葉を諒解すると、
急ぎ(シーター行啓道路より)群集を悉く追い払う様に家来に指令した¹³。
(19)

家来達は、鎧とターバンに身を固め、鞭杖や太鼓を手にとって、
あちこち巡回して一斉に群集肅清を始めたのであった。(20)

熊、猿、羅刹達の群れは、八方に追い払われつつ、
そこから遠くに、追い払われて散って行った。(21)

彼等は皆、追い払われながら大きな叫び声を上げた。
それは恰も風に煽られた大海の響きに似ていた。(22)¹⁴

八方に慌てふためいて、追い払われていく彼等を見て、
(生来の)実直さから、ラグの後裔(ラーマ)は耐えられない思いがして
それを制止した。(23)¹⁵

¹² 3209*

「賢き者よ、シーターの森に入る事を努めて遠ざけよ」(?)

¹³ 後出 3211* に見る様に、多くの群集が好奇心から彼女を見ようと集まっていたのである。

¹⁴ 3210* 彼等は人里離れた池のように、蓮の内奥にも似て朝日の如き面をしていた。(?)

¹⁵ 3211*

好奇心に駆られたこれらの猿を見、又彼等の思いを知ったラーマは、制止したのであった。

「彼女の為に猿共が生命の危険をおかし、彼女の故に羅刹王ラーヴァナが命を落とし、

ラーマは立腹して、その眼は見る者を焼き尽くさんばかり、
賢明なヴィビーシャナを難詰しながら次の様に言った。 (24)

「余を無視して、汝は何故に人民を苦しめるのか、
この暴挙を中止せよ。彼等人民は余の身内であるから。 (25)¹⁶

家屋も、衣服も、壁堀も、隠蔽も、
更に又この様な王室への敬意も女を護る所以のものではない。よい行い
のみが女を護る。 (26)

不幸、危険、戦争、婿選び自選式、
祭式執行時、そして結婚式の於いては、女を見ても罪にならない。
(27)

この女は戦争にも行ったし、又大なる危険にも遭遇した。
従って彼女を見ても罪になる筈がない。特に余の眼前では就中然りである。
(28)

それ故、ヴォビーシャナよ、急ぎ彼女を余の前に連れて来い。
シーターは、(衆人環視の中) 朋友達に囲まれている余に会見すべきである」
(29)¹⁷

彼女の為に大洋に百ヨージャナの橋が架けられた、ヴィデーハの王女とはどんなか、
宝の如き婦人とはどんなだろう」と口々に語り合う彼等の意図を知って、
「ヴィデーハの王女は公開の形で参内すべし」命令した。

¹⁶ 3212*

ヴィビーシャナはそれを聞いて内心不安に思ったが
駕籠の覆いはずしてラーマのもとに赴いた。
一方、シーターは感情を害し、内に怒りの込み上げるのを感じたが、
威厳を保ち、夫の言葉だと思ってそれを抑えた。
それからラーマを見ると、美しい顔のシーターは恥ずかしくなって、
内に喜びを感じながらも、怒りの故にそれを抑えた。
すると大きな雷雲の群れが轟くような大声で、賢明なラーマはヴィビーシャナに言
った。
「汝もよく知っている様に、人民は王にとっては息子も同然、されば、見たければ
彼等は母を見るがよい」

¹⁷ 3213*

それ故にシーターは駕籠を打ち捨てて、二本の足で歩いて我が下に参れ。

ラーマにこの様に言われて反省したヴィビーシャナは、
ラーマの仰せ畏み、シーターを彼の側へ連れて来た。(30)¹⁸

するとラクシュマナ、スグリーヴァ、それに猿のハヌマーンは
ラーマの言葉を聞いて、いたく不安になった。(31)¹⁹

妻のことを凡そ顧慮しない、残酷な言葉の調子より察して、
彼等はラグの後裔（ラーマ）がシーターに対して不快に思っているのだ
と判断した。(32)²⁰

一方、かのミティラーの王女（シーター）は、恥しさに身のすくむ思い
であったが、

ヴィビーシャナに随行されながら、夫の前に進み出た。(33)²¹

彼女は衆人環視の中、恥しさの余り、衣に顔を隠して²²、

ここにいる猿達は彼女を目の当たり見るがよい。

¹⁸ 3214*

このラーマの言葉を聞いてヴィビーシャナを初めとする
彼等猿達は家来共々全員シーターを見たのである。

そして彼等は互いに、その眼つきからして内心怒っている事が判ったので
ラーマがこれから何をするのだろうかと心配そうにラーマの挙動を注視し、
彼の以前には見せた事のなかった様子に恐れて、「即刻追放」を懸念した。

¹⁹ 3215*

ラクシュマナもスグリーヴァも、又総ての猿達も茫然自失、当惑しながら考えた。

²⁰ 3216*

彼等は彼女が、無残にも棄てられた花環の様に遺棄されたものと思った。

²¹ 3217*

彼等は彼女の到来を、吉祥女神、ランカー島の守護神、太陽の光が化身したのかと
思った。

猿達は皆シーターが最高の吉祥を具えているのを見て、その美しさに驚くばかりで
あった。

²²

有名な満座の中で辱めを受けた Draupadī の言に言う。

svayaṃvare yāsmi nṛpaīr dr̥ṣṭā raṅge samāgataiḥ

na dr̥ṣṭa-ṭvārvā cānyatra sāham adya sabhāṃ gatā (4)

yāṃ na vāyur na cādityo dr̥ṣṭavantau ṭvurā gr̥he

sāham adya sabhā-madhye dr̥ṣyāmi kuru-saṃsadi (MBh. 2. 62. 5)

夫の許に近づき「御主人様」と呼掛けながら、泣くばかりであった。

(34)²³

夫を神と仰ぐ彼女は、驚き（疑惑）と歓喜と愛情の三者の混ざった気持から、

夫の美しい顔を仰ぎ見た。その時、彼女の顔もそれに劣らず美しかった。

(35)²⁴

そして彼女が心労を払って、久しぶりに今昇ったばかりの満月の様に美しい、

親愛なる夫の顔を眺めた時、その顔も又、穢れない月の様に輝いた。

深窓の妃は、太陽も風も彼女を見ないという (cf. MBh. 3. 59. 19)。

²³ 3218-21*

彼女は夫の前に立ったが、それは恰も形を取ったシュリーがヴィシュヌの前に立つ如くであった。

ラーマも神々しい彼女の姿形を見るや、心に疑惑が生じて涙ぐみ一言も喋らなかつた。

彼は怒りと愛情の狭間に顔面蒼白、涙を堪えるのに精一杯で、眼を真っ赤にした。

怒りに心傷つき、深く物思いに沈み、寄る辺なき女の如く苦しみ悩み、

力づくで羅刹に攫われ、幽閉に身も痩せ細り、死界から辛うじて生還し、

無人の庵から悪漢に強奪された、罪もないいたいけな乙女、美しい四肢の王妃を前にして

ラーマは一言も喋らなかつた。(3218)

この様に言うと、ラーマは彼等衆人環視の中で、

目に涙を一杯浮かべた彼女を見て、自分もまた涙に眼を赤くした。

彼女の嘆きを聞くにつけ、猿達も皆悲しみの余り慟哭した。

ラクシュマナは顔を袖に覆って苦悩し、気を確かにして何とか涙をこらえた。

すると腰麗しきシーターは、この夫の大きな心変わりに、恥を棄てて彼の前に立ったまま動かなかつた。

彼女は、絶対に潔白であるから、気を引き締めて悲嘆を棄て、勇気を出し、(3219)

驚きと、喜びと、恐れと、愛情の交錯する中、

この非の打ち所なき彼女は、しげしげと夫の顔を見つめた。(3220)

驚きと、喜びと、愛情の故に哀れなる彼女は。(3221)

²⁴ 3222*

彼女は、今一度愛しい夫の顔を見て、この上もない心労に襲われた。

その顔は恥ずかしさ、憤懣、驚愕を交え、シーターの容姿は様々な相を呈した。

(36)

R. 6. 103.

ところがラーマは、彼の脇に慎ましく頭を垂れているミティラーの王女(シーター)を見ているうちに、

その心の中に怒りが萌して、次の様に言い始めた。 (1)

「目出度き者よ、余は男らしく戦場に怨敵を討取って、これなる汝を奪回した。

尽くさるべき人事の限りは(凡て男らしく)(*pauruṣa*)完遂されたのであった。 (2)

余の(正義の)怒りは収まり、(余に対して為された)侮辱はここに払拭された。

余は侮辱と怨敵を、二つながら同時に解消したのである。 (3)

今や余の男らしさ(*pauruṣa*)は示され、その努力も実を結んだ。

誓を果たした現在、余は己れに満足している。 (4)

軽佻浮薄な羅刹は、汝を拙者不在中に誘拐したが、

そは運命(*daiva*)の仕業、その過失も人間である余により(人事の限りを尽くして)(*mānuṣa*)²⁵克服された。 (5)

男と生まれて、身に降りかかったこの侮辱を、気力(*tejas*)によって払拭し(得)ない様な者に

何の生甲斐があるか、彼は臆病者(*alpa-tejas*)に過ぎない。 (6)²⁶

海をひと飛びして、ランカー島を破壊したハヌマーンの、

讃えらるべき仕事も今や実を結んだ。 (7)

戦場に在っては勇猛果敢、評議の庭によき助言者であった

スグリーヴァとその兵士達、彼等の苦労も今や実を結んだ。 (8)

²⁵ ここに「人為」(*pauruṣa or mānuṣa*)と「運命」(*daiva*)の対蹠が見られる。
Cf. 原 1972. この後に見える *tejas* も「人為」の義に相当している。

²⁶ *3223

彼は敵に対しても、味方に対しても、正しく身を処する者ではないから。

不徳の兄を捨てて、自ら進んで余に奉仕した
忠臣ヴィビーシャナの苦労も今や実を結んだ。」 (9)

この様にラーマが言った時、
雌鹿の様に眼を輝かせているシーターは涙を浮べた。 (10)

しかし (この様な) 彼女を見ているとラーマには、又しても更なる怒りが込み上げて来た。

大量のバターを注がれて (更に) 燃え盛る火の様に。 (11)²⁷

彼は顔面に眉をくゆらせ、斜めに (見下すような) 目付きをして、
猿や羅刹達のいる前で、シーターに向かって悪口雑言を吐いた。 (12)

「(敵より受けた) 侮辱を払拭せんとして、男が為すべき事、それらは
凡て完遂された。シーターよ、(正義の) 怒り故に敵の手から (汝を奪回したのだから)。 (13)

それは恰も、苦行によって浄められた聖仙アガスティアが、
生きとし生ける者の為に、近寄り難き南方を制覇した様なものであった。 (14)²⁸

併しながら、次の事は是非ともよく覚えていて貰いたい。あの戦争という尽力は
友達達の力によって成就されたもので、余が汝の為にしたものではない。 (15)²⁹

余は唯々、(世の) 公序良俗 (*vr̥tta*) を守らんとし、又八方から
誉れ高き我が一門に浴びせ掛けられた非難嘲笑を払わんとして (成就したものである)。 (16)

²⁷ 3224*

人の噂を怖れた王は、その心が二分されたのである。
猿や羅刹の大勢居る中に、彼は青蓮の様な眼をし、
黒髪のカールした、腰ふくよかなシーターを見たのであった。

²⁸ Text が混乱している。3225*

シーターよ、余は我慢ならず怨敵の手から汝を奪回した。

²⁹ 3226*

海を渡り、又鬱憤を晴らした。汝の為に、余の為したる事。

貞操を疑われた女が、余の面前にいるのは³⁰、
余にとって何とも辛い、それは恰も灯火が、眼病を患う者の眼前ある様
なものである。 (17)

それ故に、ジャナカの娘よ、暇をやるから (何処なりと)、好きな様に
東西南北何処へでも行くがよい。余にとって汝は最早や用はない。(18)
良家に生を享けた男であれば、なんびとが他人の家に逗留した事のある
女を

歓び勇んで再び迎え入れる事が出来るであろうか³¹。 (19)

ラーヴァナの膝に弄ばれ、汚らわしき眼で見つめられた女を
余がどうして今一度受容れる事が出来ようか、偉大なる名門 (の誇り)
を思えば。 (20)

余が汝を (敵の手から) 奪回して、(一門の) 名誉は回復された。
余は汝に愛着など持っていないから、ここより好きな所へ行くがよい。
(21)

以上は、熟考の末に決心して余の到達したところを述べたものである。
ラクシュマナであろうと、バラタであろうと、汝は好きな様に心を寄せ
るがよい。 (22)

猿の長スグリーバでも、羅刹の長ヴィヴィーシャナでも、
シーターよ、自分の好きな様に心を寄せるがよい。 (23)³²

蓋しラーヴァナは、神々しく、魅力ある汝を見、
自分の家に久しく侍るのを見て、我慢出来る筈がないから」。(24)³³
すると、当然優しい言葉を聞くに相応しい彼女は、この悪口雑言を

³⁰ 3227*

汝は、たとえ他人に好意を寄せても、私の大事な女である。

³¹ *suhṛt-lekhena cetasā* は難解。注記に見える *raṇa-ṛaṇikāyuktēna* に拠って訳出した。

³² 3228*

以下に Śatruḥṇa, Nala, Hanumat 等、並み居る家来の名前が列挙されるが、煩瑣を厭って省略する事とした。

³³ MBh. 3. 275. 10-13 (Rāmopākhyāna) にもこのラーマの悪口雑言 (*dāruṇa vacas*: MBh. 3. 275. 14) が語られる。

久しぶりに (再会した) 愛する夫から聞いて、ミティラーの王女は
しとど涙を流すのであった。震えながら、
恰も巨象の鼻に踏み躪られた蔓草の様に。 (25)

R. 6. 104.

この様にヴィデーハの王女 (シーター) は身の毛の弥立つ様な悪口雑言
を、
怒ったラグの後裔 (ラーマ) に言われて、少なからず動揺した。 (1)
彼女は満座の中で、以前聞いたこともない様な
荒々しい夫の言葉を聞いて、恥かしさの余り、狼狽した。 (2)
このジャナカ王の娘は (恥しさを余り) 自分の身体の中に食い入らんば
かり、
矢の様な言葉により恰も本物の矢で刺された思いで、しとど涙を流した。
(3)

涙に穢れた顔を自分で³⁴拭いながら、
おもむろに言葉を詰らせつつ、彼女は夫に次の様に言った。 (4)³⁵
「どうして貴方はこの様な、耳に残酷に響き、しかも私の身に覚えのない
荒々しい言葉を私に仰るのです。勇士よ、恰も賤しい (*prakṛta*) 男が賤
しい女に言う様に、 (5)
大なる腕を有するお方よ、私は貴方がお考えになる様な女ではありません。
信じて下さいませ。私は自分の貞操に賭けて貴方にこれを誓います。
(6)

別種の女達³⁶の振舞いからの連想によって (*pracāra*)、貴方は女性一般に

³⁴ *sva*: 直訳すれば「自分の」となるが、敢えて副詞的に訳した。

³⁵ 3229*

「大王様、名門に生を享けて、更に名門に嫁いだ女を
恰も踊り子の様に、貴方は他人に与えようとなさいませ」

³⁶ *prthag-jana* (凡夫) の連想によれば *prthag-stri* は当然「凡女」となるが、意味

不信感をお持ちです。

そんな疑惑はお捨て下さい、若し貴方が私 (のこと) をよく理解して下さるのなら。 (7)

たとえ私が (他の男に) 身体を触れられたとしても、王よ、それは私の意思からではありません。

私は進んでそんな事を致しません。それは運命の仕業、悪戯というものです。 (8)

私の自由になる心は常に貴方に在ります。

身体が他人の意のままになってしまった時、自由の効かない私に一体何が出来ましょう。 (9)³⁷

共に育ち、(久しく) お付き合いしながら、誇りを与えて下さるお方よ、それでも尚貴方が私を理解して下さらないのなら、私はもうとうの昔に (*śaśvatam*) 死んでいたのも同然です。 (10)

(以前) 貴方は勇士ハヌマーンを偵察者としてお遣わしになりました。

そして私がランカー島に居りました (事が判明したのですが)、その時 (直ぐ) に、勇士よ、どうして貴方は私を捨てて下さらなかったのですか。 (11)

(そしたら) あの猿王の目の前で、貴方の (この) 御言葉の直ぐ後に、貴方に捨てられた者として、勇士よ、私は命を絶っていた筈です。

(12)

(その時私が命を絶ってさえいれば、) 生命を危険に曝してまで、貴方が努力なさる必要もなかったでしょう。

又 (貴方の) 御友人達の苦労も空しい事にはならなかったでしょう。

(13)

でも貴方は、人中の虎よ、怒ってばかりいらっしゃいます。

はもとより「娼婦」の義である。

³⁷ 3230*

私は嘗て一度も、心の中ですら、貴方を裏切った事はありません。

この真実に賭けて、神々よ、どうか私に安全をお与え下さい。

恰も賤しい (*laghu*) 男のする様に、(私が) 女であるという事だけを第一にお考えになって。(14)

名目的に私はジャナカと大地 (の女神) を父母として生れて来たものではありません³⁸。

(それなのに) 貴方は (私の) 日頃の行い (*vytta*) を第一に考えて下さらない。おお、日頃の行いを御存知のお方よ。(15)

若い時、若い貴方によって握られた手 (結婚の約束) を貴方は大事にして下さらない。

のみならず私の愛、操、(その他) 総てを蔑ろになさいます」(16)

と、この様に泣きながら、嗚咽に声を詰らせて語って、シーターはうな垂れて、思案に暮れているラクシュマナに次の様に言った。(17)

「スミトラーの息子よ、どうか私の為に火葬の薪を用意して下さい、これがこの苦悩を鎮める唯一の薬です。

身に覚えのない非難に傷ついて、私は最早生命を永らえる積りはありません。(18)

如何程徳行を説いても、機嫌を損ねた夫によって満座の中で遺棄された私に

相応しい道は唯ひとつ、火の中に入る事だけです」(19)

ヴィデーハの王女に斯く言われた、敵将を砕く勇士ラクシュマナは、耐え切れずにラグの後裔 (ラーマ) の顔を打ち眺めた。(20)

でも、その顔色からラーマの意の在る所を知ったこの勇士、スミトラーの息子は、

ラーマの思いを意に体して、火葬の薪を用意するのであった。(21)³⁹

³⁸ *apadeśena* : 「相応の理由のあるれっきとした事実で、空しくそうやってきたのではない」の義。

³⁹ 3231-3232*

蓋し、その時は、友人のなんびとも死神の様なラーマを宥める事も、又忠告する事も、又見る事も出来なかった。(3231) ラクシュマナは猿達と共に清浄な薪を集めて、

すると面を垂れたラーマにゆっくりと右繞の礼をなしてから、
このヴィデーハの王女は燃え盛る火に近付いた。 (22)⁴⁰

神々と、バラモン達に一礼して、ミテイラーの王女は
両手を合わせ合掌なし、火の側で次の様に言った。 (23)⁴¹

「私の心はラグの後裔（ラーマ）から片時も離れた事はありません。
（この真実に賭けて）この世の総てを見続なわし給う火の神様は、何卒ど
うか私をお守り下さいませ」 (24)⁴²

この様に言ってヴィデーハの王女は火の周りを廻ってから、

急ぎ火葬の薪を組み、唯々思案に暮れるのみであった。(3232)

⁴⁰ 3233*

するとシーターは面を上げて次の様に言った。

⁴¹ 3234*

「私は行いでも、言葉でも、身体でも、ラグの後裔（ラーマ）に対して、
嘗て一度も公にも、又密かにも、悖るような事は致しませぬ。

⁴² この頰については Hopkins, 320-1 and Lariviere, Divyatattva 33 参照。
3235-3240*

心でも、言葉でも、身体でも、醒めている時でも、眠っている時にでも、
若しラグの後裔（ラーマ）以外の男に夫の思いを懐いたなら、
火の神様、その時は私の身体をすっかり焼いて下さいませ。

善悪行を御存知の、一切世界の目撃者である貴方は。(3235)

行い清らかな私を、ラグの後裔（ラーマ）が穢れた女と思っている様に。(3236)

若し、火の神様が私を生涯一夫の誓を守っている女と認めて下さるなら、
三界の主宰者である火の神様はどうか私を全て（危険）からお守り下さい。(3237)

行いでも、心でも、言葉でも、私が一切の人倫の道を知り給うラグの後裔（ラーマ）に

背いていないなら、火の神様は何卒どうか私をお守り下さい。(3238)

でも、若し悪性の娼婦の様にラーマを裏切るようでしたら、
どうか地獄の火となって、火の神様は（私を）灰にして下さい。(3239)

お天道様、風、八方、お月様、昼と夜、それに朝焼けと夕焼け、更に大地、
その他（八百万の神様）、どうか（私を）貞節に輝く女とお認め下さい」(3240)

ここで彼女は「貞節なれば守護」を求め、「不貞なれば焼死」を求めている。
この点は嘗て H. Lüders の言った “Zeuge=Rächer” (Lüders, 666.) の構図を想起
せしめる。

心に何の拘りもなく、燃え盛る火の中に身を投げた。(25)⁴³

その場に居合わせた大勢の老若男女は、
ミチラーの王女が火の中に身を投げるのを目撃した。(26)⁴⁴

彼女が火の中に入って行くと、「嗚呼、嗚呼」という叫び声が
羅刹や、猿の中から起った、奇蹟にも似て。(27)⁴⁵

43 3241-3242*

と言って、彼女は涙を流しながら、夫に目を据えながら。(3241)
焰の中に入ろうとして、今一度、次の様に言った。
「火よ、貴方は一切生類の身体の中においでになります。
神々の中の最高者よ、私の身体の中に住む目撃者として、どうか私をお守り下さい」
彼女のこの言葉を聞くと、彼等総て猿の将達は顔に涙を浮かべ、恐れ之余り泣き出した。

それから切れ長の眼を有するシーターはラーマに一礼して。(3242)

44 3243-3244*

精錬された黄金の如き彼女は、精錬された黄金の装飾を纏って、
総ての人達の眼の前で燃え盛る焰の中に身を投じた。
一切生類は、大きな瞳をしたシーターが火の中に落ちて行くのを見たが、それは素晴らしい黄金の祭壇 (*vedi*) が火の中に落ちて行く様であった。
総ての婦人達は、恰も祭式に於いて真言によって聖別された供物 (*vasu*) の宝の流れのようになって火の中に落ち行く彼女を見て叫び声を上げた。
三界の住人達、神もガンダルバも悪魔も、彼女のその様を見た。(3243)
三界に住む総ての敬虔なシッダ達も近づいて彼女が火の中に入るのを見た。(3243A)

その時、月輪の様な顔をしたシーターが火の中に入り行くのを見て、
四方の守護神も眼に悲しみの涙を浮かべ、唯々驚くばかりであった。(3243B)
切れ長の眼をしたミティラーの王女が火の中に入り行く様は、
恰も犠牲祭に於いて、サーンキヤの儀軌に従って真言に清められた供物が火の中に供えられるの如くであり、
又天界から一人の神が呪われて地獄に落ち行く如くであった。(3244)

45 3245-3248*

その時、シーターが逡巡する事なく、燃え盛る火の中に入ったのを耳にして、
羅刹も猿の長も、すっかり困惑して思案に暮れるのみであった。(3245)
するとその時シーターに讃歌を捧げられた火の神 (*havya-kavyeśa*) は、
恰も祭式の庭に呼寄せられたかの如く、(己が) 姿を現して、

R. 6. 105.

すると毘沙門王 (Kubera)、又敵を無力ならしめる閻魔 (Yama)、
 千眼を有する大帝釈天 (Indra)、敵を悩ます水天 (Varuṇa)⁴⁶、 (1)
 三眼を有して牡牛に跨る聖大天 (Śiva)、
 一切世界の創造者にして梵を知れる者達の最たる梵天、 (2)⁴⁷
 彼等は挙って太陽に紛う天車を駆り、
 ランカーの都にやって来て、ラグの後裔 (ラーマ) の許に近づいた。
 (3)⁴⁸
 それから彼等神々の長は、手に飾りをつけた太い腕を (互に) 取り合っ

シーターに讃歌を捧げられている内に、彼の形は、
 風に吹かれたガンジス河の冷たい水となった。
 燃え盛る彼の側に居た猿達は、火が冷たくなったのを見て吃驚して、
 火の中に入ったシーターはヴァシシュタの妻アルンダティーの如く、
 又シヴァ神の妻パールヴァティーの如く潔白であると思った。
 見物したいと思って、全ての兵士達も集まった。
 彼女はラーマを心に念じて火に近づき、それからこの神々しい装飾に飾られた
 妃は飛び込み、万人のしている前で火の中に入った。(3246)
 さて、これら人々の叫び声を聞いた途端、ラーマは心を痛め、
 この本性律儀な彼は眼に涙を浮べながら、暫し思いに耽った。(3247)
 彼は弟ラクシュマナ、そして並み居る全ての猿達と一緒に
 ヴィデーハの王女シーターが火中に飛び込むのを目撃した。(3248)

⁴⁶ 後にも出る様にこれら四神は世界の守護神 (*loka-pāla*) である。四神は又
 MBh. 3. 275. 18 に他の神々と共に現れる。

⁴⁷ 3249*-3250*

更に天車を駆って虚空を歩き、その威光が神々の王にも紛う十車王がその場にやっ
 て来た。(3249)

同様に全ての父祖達、全ての太陽、アシュヴィン双神、韋駄天、カーシュヤパを初
 めとする仙人達、
 天の楽人 (ガンダルバ)、天の踊り子 (アプサラス)、ガルダ、蛇、羅刹、
 夜叉 (*punya-jana*?)、その他神通力を有する天人 (*siddha-cāraṇa*) 達。
 (3250)

⁴⁸ 3251*

彼等は優しく、カークスタと姓名で呼掛けた。

て、

その場に合掌して佇むラグの後裔（ラーマ）に次の様に言った。 (4)⁴⁹
「一切世界の最高の創造者にして、知ある者の中の最たるお方であるの
に、

どうして君は火中に飛び込むシーターを黙過するのか。

どうして君は御自身が神群の最高者である事に気付かないのか。 (5)

君は天則を旨とし (*ṛta-dhāman*)、ヴァス神群の中の最初のヴァス⁵⁰、造
物主であり、

三界の最初の創造者、独立不羈の自在者である。 (6)

諸ルドラの中の第八ルドラ、サードヤ神群の中の第五にして、

アシュヴィン双神は君の両の耳、日月は君の両の眼である。 (7)

敵を悩ます者よ、君は世界の始めと終わりに於いてのみその姿を現すと
いうのに、

ヴィデーハの王女を、恰も賤しい男の様に、黙過している」 (8)

この様に彼等世界の守護神達に語りかけられた時、この世界の主であり、
正義保持者の中の最たるラーマは、彼等神々の長達に次の様に言った。

(9)⁵¹

「私は自分を十車王の息子で、ラーマという一介の人間とっておりま
すが、

私が何人であり、誰の子か、又どこからきたのかを貴方がたは説明して
下さい」 (10)⁵²

⁴⁹ 3252*

手に飾りをつけた、門にも似た彼の腕を取って。

⁵⁰ 注釈によると、この部分は「以前の劫期に於いてヴァス達の中のリタ　ダーマ
ンと名付けるヴァスであった」としている。

⁵¹ 3253*

この様に言われると、正義を本質としているラグの後裔、ラグの子は、

⁵² 3254*

すると千眼を有する最高の我等の祖父（帝釈天）は、彼に向かって次の様に言った。
「君がどの様なお方かを、これなる自生者、聖梵天が説明するであろう」

斯く言うカークスタに向かって、梵を知れる者の最たる梵天は言った。
「どうか私から事の真実を聞き給え、おお、勇猛空しからざる者よ。

(11)⁵³

君は輪を武器とする王、全能の神、聖ナーラーヤナで、
過去から未来に亘って、その怨敵を退治する一牙の野猪である。(12)
おおラグの後裔よ、中間と終りに於いては不滅の聖音 Om であり、又真
実の梵であり、

君は世の最高の正義、四つの腕を持てるヴィシュヴァクセーナである。

(13)

シャルンガ弓の保持者、フリシーケーシャ、プルシャ、最上のプルシ
ヤ、

不敗の剣士、ヴィシュヌ、大力のクリシュナである。(14)

君は軍隊の指揮者にして且つ大衆の指導者、理性、善性 (*sattva*)、忍耐、
克己、

起源にして且つ繁栄、副帝釈、悪魔マドフの殺戮者である。(15)

帝釈天の働きをなす者 (*indra-karman=Viṣṇu*)、大インドラ、臍に蓮華を持
つ者、戦いを終息させる者、

神聖なる大仙達は、君を頼りになる庇護所と呼んでいる。(16)

君は千の角を有し、ヴェーダを本質となし、百の舌を有する大牡牛、

君は祭式にして、感嘆詞 *Vaṣat* であり、オームの字音、おお敵を悩ます
者よ。(17)⁵⁴

誰も君の起源や終結を知らず、誰も君が誰であるか知らない。

でも君は一切生類、バラモン、牛、一切方位、虚空、山、森の中に顕現
している。(18)

⁵³ 3255*

そこで自生者にして測り知れない光輝を持つ神は、彼の美しい腕を掴んで
その前世の行いを思い出さしめんと彼に向かって次の様に言った。

⁵⁴ 3256*

君は三界の最初の創造者にして独立不羈、
シッダやサードヤ達に先んじて彼等の依所となっている。

君は千の足、百の首、千の眼を有して、諸々の生類と、山を頂く大地を支える。 (19)⁵⁵

君は大地の果てに、水の中、大きな龍となって顕現し、三界と神、天の楽人、悪魔を支えている。 (20)

私は君の心臓であり、弁財女神は君の舌、神々は君の体毛として、梵天により造り出された。 (21)

君が目を瞑ると夜となり、目を明けると昼となる。それらの残存作用 (*samskāra*) はヴェーダとなった。君なしにそれは存在しない。 (22)⁵⁶

一切世界は君の身体、大地は君の安定性、火はその怒り、水 (*soma*) は上機嫌、おお、シュリーヴァツァを印しとなす者よ。 (23)

往昔、君は三步を以って三界を跨いだ。大悪魔バリを縛って、君は大インドラを王に据えた。 (24)⁵⁷

⁵⁵ 3257*

君は一切生類の創造者にして、一切は君に依拠している。

⁵⁶ 3258*

ラーマよ、君の腹は海であり、帝釈天や神々である。

⁵⁷ 3259-3260*

時到来ば、君は諸世界を収斂して自己の内に収め、可見、不可見な仕方唯一不動の海となり、恐ろしい獅子の姿を現じてヒラニヤカシブを殺戮した。

聖なる君、偉大なるプルシャ、

全てを見続わし、一切生類の拠り所、ヴァースデーヴァに敬礼し奉る。

初代の神、一切を見続わし給う君、

聖仙ナーラーヤナ、ナラ、ハりに敬礼し奉る。(3259)

地界の底に在っては、馬の顔をして

生じた最高の天的な水を繰り返し焼き給う。

最高の輝きとして伝えられ、最高の苦行として伝えられるもの、

最高より更に優れたるもの、最高のアートマンと語られるもの、

更に又、最高の解脱なるものは、それこそ君であると言われている。

神への供物、祖霊への供物、それらを浄化するもの、天界と解脱の両者の到達、

シーターは吉祥女神にして、君はヴィシュヌ神、クリシュナ、創造者、
ラーヴァナ退治の為に、(偶々) この地上に人間の肉体を取ったのだ。

(25)

正義保持者の最たる者よ、君は我々のために為すべき事を成し遂げた。
ラーヴァナが殺された今、ラーマよ、どうか歓喜し勇躍、天に登り給え。

(26)

君の腕力、気力は空しからず、その勇猛又然り。

君を心から信ずる者は空しからず、必ず報われるであろう。 (27)⁵⁸

君を不滅の神、古来最高のプルシャとして心から信じている人々、
そうして君の名誉を讃えるであろう人々、彼等に決して敗北という事は
ない」 (28)⁵⁹

生住滅の最高の起源であると人々は君の事を言う。

祭式、祭主、二種の祭官、ホートリとアドヴァルユ、
祭式の功德の享受者、君こそそれらの全てであると讃えられる。(3260)

⁵⁸ 3261*

ラーマよ、君に会いまみえる事、空しからず、讃える事、又空しからず。

⁵⁹ 3262*-3266*

これらの神々、彼等は将来とも空しからず、ここに疑いなし。(3262)

(君を) 讃えて死に行く彼等は天界に赴く、ここに疑いなし。(3263)

この世でも、又あの世でも彼等は常に欲する所を成就する。(3264)

これは古仙達と神々が伝える讃歌、伝来の物語である。(3265)

最高のプルシャである君を頼りとしている人々が、どうしてこの世で敗退することがあろう。

四つの腕を持つ神様を頼りとしている人々が、この世で(敗退する事など) 有り得ない。

神よ、この世で彼こそ優れて願い事を叶える。

己が神力を繰り広げる者よ、劫末を見続なわす者よ、

無始無終なる者よ、世界の種子、蓮を臍に持つ者よ、君に敬礼し奉る。

劫期転変すること千の果てに、悪魔や仙人の群等をも含む全世界は、恰も諸々の光線が太陽の中に入り行く様に、君の腹中に赴くであろう。(3266)

R. 6. 106.⁶⁰

- 梵天の述べたこの吉祥な言葉を耳にするや、(火の神)
 ヴィバーヴァスの子はヴィデーハの王女(シーター)を抱いて立ち上がった。(1)
- (その時、)精錬された金の装飾を帯び、オレンジ色の衣服をまとい、
 長けなす黒髪はカールして、この若き乙女は旭日の如く輝いていた。(2)
- この様な姿形の、生氣ある花環に飾られ、今や心も晴れた
 ヴィデーハの王女を抱いて、火の神は彼女をラーマに手渡した。(3)
- その時、世界の証人である火の神は、ラーマに次の様に言った。
 「ラーマよ、これなるヴィデーハの王女は今汝のもの、彼女には一点の
 過失もない。(4)
- 言葉でも、心でも、思慕でも、眼でも
 彼女は潔白であり、常に浄行を心掛け (*vr̥tta-sauṇḍira=sambodhitavān*)、嘗
 て汝の意に悖る事はなかった。(5)
- 如何にも彼女は力に酔い痴れた羅刹ラーヴァナによって
 人気無き森から連れ去られ、可哀想に不本意にも汝と別れ、(6)
- (彼の)後宮に幽閉され、監視下に置かれていた (*gupta*) が、常に汝を思
 い、汝を唯一の頼りとしていた。
- 恐ろしい形相をした、畸形な羅刹女達に監視されていた (*rakṣitā*) (7)
- このミチラーの王女は、色々誘惑され、又威嚇もされたが、
 只管汝だけを心に思って、この羅刹に対し一顧だにしなかった。(8)
- ラグの後裔(ラーマ)よ、この清浄にして罪無き乙女を受け取りたまえ。
 最早これ以上何事も喋々すべきでない。余はこれを汝に命令する」

⁶⁰ 3267*

すると、雄弁者の中の最たるラーマは心中喜んで、
 正義を旨とする彼は、喜びに眼をぱっちりさせて一瞬思いに耽った。(3267)
 すると、火の神は薪を払い、ヴィデーハの王女(シーター)を(そこより)取り上
 げて立ち上がった。己が姿を忽ち現じて、かのジャナカ王の娘を。(3268)

(9)⁶¹

この様に言われて、栄光に輝き、堅忍不拔、勇壯にして
且つ正義を守る者の中の最たるラーマは、神々の長に向かって次の様に
言った。 (10)⁶²

「何としてもシーターは、三界に於いて火による浄化を必要としました。
彼女は潔白であります、何分にも長い間ラーヴァナの後宮に住してお
りました。 (11)

『何と、十車王の息子ラーマは愚かにも愛欲に駆られている』
と心ある人々は私を非難するでしょう、(先立って先ず) ジャナカの娘
の潔白の証しを立てておかないと。 (12)⁶³

二心なく、信愛を籠め、心に私を大事に思っているとは、
私もよく承知しております、ミティラーの王女、ジャナカ王の娘のこ
とを。 (13)

でも、三界の信用を思えばこそ、真実を旨と為す私は、

⁶¹ 3269*

「火というものは隠れても、又明るみに出ていても、総ての事を観察している。
それ故に、直接目の当り見ている余には、シーターの事が(凡て)判っているの
だ」

⁶² 3270*

「神々並びに祖先への供物を司り給う神、人々を清め給う火の神よ、
どうか私の口から、彼女を捨てた理由をお聞き下さい。
私は彼女が常に感官を制し、潔白で、私に愛情を捧げ、
身口意三業に亘り、生活信条も行いも堅固である事をとうに存じております。
3271*

でも邪な道を行く羅刹が姦計を廻らして、
私の居ない隙に、無理矢理力づくでいたいけな乙女を連れ去りました。
その為に、女であると言う事から人々の間に疑惑が生じ、それは私にもふりかかり
ました。

羅刹というものは所詮、行い悪く、道を踏み外すものですから。

⁶³ 3272*

シーターへの非難、卑しむべき行い、
それにこの世に於ける私自身の不名誉は、総て同時に払拭されました。

敢えてヴィデーハの王女が火中に入って行くのを黙過したのです。

(14)⁶⁴

又、己れ自らの威光によって守護されている、瞠目の彼女を
ラーヴァナも犯す事は出来ません。恰も大洋が汀を超え行く事が出来な
い様に。(15)

蓋し本性穢れた彼が、ミティラーの王女を心によってすら犯す事は出来
ませんでした。

人が燃え盛る焔は近づき得ず、それに触れる事が出来ない様に。

(16)⁶⁵

純潔な彼女は、ラーヴァナの後宮に在っても、彼の思いのままになり得
ませんでした。

蓋しシーターは私を離れてなく、それは太陽光線 (f) が太陽 (m) を離
れてないと同じです。(17)

ミティラーの王女、ジャナカの娘は、三界に徴して、潔白となりました。
彼女を捨てる事は出来ません、己を持する事堅固な者が、名誉を捨て得
ぬ様に。(18)

当然の事ながら、私は皆様方の御忠告に従います。

何となれば皆様は愛情深く、世に尊敬され、常に有益な事をお話し下さ
いますから」(19)

この言葉を言い終ると、大力無双の人々により、自らの行為を讃えられ
ながら、

力強きラーマは愛しき妻と結ばれて、(以後) 幸せに過ごした、もとよ
り彼は幸せを享けるに値する者であったから。(20)

この Rāmāyaṇa の物語に見える貞節の証明は「火」による神明裁判の形

⁶⁴ 3273*

火の中に入り行くシーターを私は敢えて止めませんでした。

⁶⁵ 3274*

疑いもなくラクシュマナの呪いにより、彼女は連れ去られたのです。

と言うのも草庵に在ってこの少女は、彼に悪口雑言を吐きましたから。

を取っているか⁶⁶、それは後世の法典が規定するものと必ずしも同一ではない⁶⁷。神明裁判の規定を盛る Manu 法典の箇所は唯単に三種を列挙するのみで、その中の最初の二は「火」と「水」に関する。

*agnim vāhārayed enam apsu cainam nimajjayet
putra-dārasya vāpy enam śirāmsi sparsayet prthak (114)
yam iddho na dahaty agnir āpo nonmajjayanti ca
na cārtim rchati ksipram sa jñeyah śapathe śuciḥ (MS. 8. 115)*

或いは彼に火を運ばせ、水に潜らせ、或いは息子及び妻の頭に別々に触れさすべし。 (114)

燃える火が彼を焼かず、水が彼を浮かばせず、或いは直ぐに災いに見舞われない時は、彼は宣誓に関して潔白であると知るべし。 (115)

後世の Yājñavalkya 法典 (YS. 2. 104-107)、Nārada 法典 (NS. 20. 15-24) に至ると、その規定する所は更に異なるが、少なくともこの Sītā の神明裁判にあっては、神性を有する「火」がその潔白を証する証人となっている⁶⁸。

尚、彼女はこの後も、今一度身の潔白 (*ātmanah śuddhi* R. 7. 86. 4)⁶⁹を証さねばならなかった。世間のあらぬ噂 (*lokāpavāda*: R. 7. 42. 17-19)⁷⁰を怖れた Rāma は再度「帝王の道」と「夫婦愛」のジレンマに陥るが、ここでも彼

⁶⁶ 但し MBh. の Rāmopākhyāna にはこの種の神明裁判の記述がない。そこでは彼女の悲痛な宣誓に感応した風神、火神、水天、梵天と十車王が彼女を弁護する (MBh. 3. 275. 26-35)。

⁶⁷ Cf. Lariviere 35.

⁶⁸ Cf. agni, vāyu, candra, āditya, antarātman (R. 7. 44. 6-9)

⁶⁹ 尚、彼女の「潔白」は又次の様な表現を取っている。 *apāpā* (7. 44. 6, 7, 48. 10, 18, 87. 14)、 *śuddha-samācārā* (7. 44. 8, 47. 4, 49. 3)、 *satī* (47. 4)、 *viśuddha-bhāvā* (7. 48. 10)。 MBh. 3. 275 に在っては、 *apāpā* (26)、 *sad-vṛttā* (7)、 *svṛttā* (13) 等の表現が見られる。

⁷⁰ *paurāpavāda* 7. 44. 3, 10.

は前者を後者に優先した。彼の命により、弟 Lakṣmaṇa は彼女を誘ってガンジス川の対岸に連れ行き、そこで捨てて帰ったのであった。一方 Sītā は、聖者 Vālmīki の庵に保護されそこで双生児を産み落とし、後年 Rāma と再会する。叙事詩の大団円、今一度身の潔白を誓う有名な Sītā-sapatha (R. 7. 86. 6, 13, 7. 87. 7) には既述の「火」に替って「大地」が現れて奇蹟を生じた。最後に R. 6. 104. 24 に類似する章句を引用して本節の締めくくりとする。

yathāhaṃ rāghavād anyam manasāpi na cintāye
tathā me mādhavī devī vivaraṃ dātum arhati (R. 7. 88. 10)

私は、心にもラゲの後裔（ラーマ）以外の男性を思った事がない。
 (この真実に賭けて) 大地の女神は、私の為に、門開を与え給え。

斯くして、もと哇より生れた Sītā はその時、地に生じた裂け目に呑まれて大地に戻り、一方神の化身であった Rāma もその後、天上に帰った。

(I-2) Yaśodharā

女性がその貞節を疑われ、身の潔白の証しを立てる為に神明裁判に拠ったとなすモチーフは仏教にも取り入れられた。そしてその嫌疑を受けた当の女性は南伝でしばしば Rāhula-mātā の名で呼ばれる釈迦の妻 Yaśodharā であった。しかも彼女は Sītā の場合と異って妊娠し、且つ出産したから、その嫌疑は母のみならず延びて子の嫡子性に係わり、一門の汚辱として問題はより深刻となった⁷¹。それは嫡子の認知を拒む夫を難じるシャクンタ

⁷¹ 方広大莊嚴經卷第 12. 「諸眷属皆有疑心。太子去国十有二載。何從懷孕羅睺羅」(大正 3. p. 616a7-9)、佛本行集經卷第 51. 「爾時釈種。皆共同声。作如是言。耶輸陀羅。汚辱家者。我等应当如辱家法而苦治之……爾時輪頭檀王。告諸臣言。我今勅令耶輸陀羅及所生子俱当就死」(大正 3. p. 888c8-24)、衆許摩訶帝經卷第 6. 「時耶輸陀羅忽然懷妊。王即告諭。宮人眷属。自今而往。不得説言太子在山苦行之事。虚彼傷惱損動腹子」(大正 3. p. 949a27-b1)。

ラーの悲劇を想起せしめるが、その経緯はかなり異なっている。筆者はもとより仏教学の専門家でないので、以下 Yaśodharā に関連する所は僅かに女性の「不貞嫌疑物語」の一環として触れるに留まる。文献の不備と不網羅は筆者自らが熟知している所であるが、今回この問題を論ずるに当って特に本学の H. Durt 博士の御教示に預かった⁷²。

周知の通り釈迦は出家以前に結婚生活を営んだが、彼の妻子に関しては幾つかの異なった伝承が存在する⁷³。

通常彼の妻は Yaśodharā (耶輸陀羅) と言われるが、彼女以外に複数の妻のあった事が幾つかの北伝の仏典中に見出される。既に今から 90 年前、フランスの碩学 Noel Peri は「釈迦牟尼の妻達」と題する長文の論文を発表して、この問題を詳細に論じた。今その細部に立ち入る事が出来ないが、彼がその所論を纏めて分類した所に依ると⁷⁴、それは一人説、二人説、三人説の三つに分かれる。

その中、「一人説」と言っても、釈迦が最初 17 歳の時に娶ったのは Yaśodharā ではなくて、Gopā (Gopī, Gopiyā とも言われる) であるとすものは、普曜経 (AD. 308)⁷⁵、太子瑞応本起経 (AD. 250)⁷⁶、異出菩薩本起経 (AD. 300?)⁷⁷、四分律 (AD. 405)⁷⁸、六度集経 (AD. 251-280)⁷⁹、太子須大拏経

⁷² 以下の記述は主として次の二著に拠っている。

Noel Peri, "Les femmes de Çākya-muni," BEFEO 1918 pp. 1-37

E. Lamotte, Le Traité de la grande vertu du sagesse II pp. 1001-1008.

⁷³ 木村、平等。pp. 188 and 682 (note 55)、中村、pp. 174-175 notes 9-11.

⁷⁴ Peri, 28-29.

⁷⁵ 「時釈家女名曰俱夷」(大正 3. 500c18, 20, 22, 24)、「於斯執杖積種以女俱夷送詣白淨王宮為菩薩妃」(大正 3. 502a18-19)、「明日俱夷當復辛苦」(大正 3. 507a22-23)、「仏語父王告諸群寮。俱夷守節貞潔清淨……此吾之正子縁吾化生勿咎俱夷也」(大正 3. 536c11-19)。

⁷⁶ 「語頃王家女過。厥名瞿夷……瞿夷曰善。願我後生。常為君妻」(大正 3. 472c29-473a13)、「最後一女。名曰瞿夷」(475a10)

⁷⁷ 「俱夷曰。大善。願我後生為卿作婦」(大正 3. 617c13-14)、「最後一女。名曰俱夷。太子曰。吾欲娶是女。王即為太子娶之。為太子娶婦」(大正 3. 619a15-17)

(AD. 388-407)⁸⁰、仏説大意經 (AD. 394-468)⁸¹、報恩經 (AD. 25-220)⁸²、生經 (AD. 166-317)⁸³、菩薩投身經 (AD. 377-439)⁸⁴、賢愚經 (AD. 445)⁸⁵、並びに後世撰集の仏教百科全書、経律異相 (AD. 502-557)⁸⁶、法苑珠林⁸⁷ 等⁸⁸、比較的初期の漢訳經典に見える⁸⁹。

これに反してその一人を Yaśodharā となすものは方廣大莊嚴經 (AD. 680)⁹⁰、過去現在因果經 (AD. 440)⁹¹、摩訶僧祇律 (AD. 416)、佛本行集經⁹²、

⁷⁸ 「爾時蘇羅婆提女者。豈異人乎。今釈女瞿夷」 (大正 22. 785c17-18)

⁷⁹ この中、第 7 話は「時王者吾身是。妻者俱夷是」 (大正 3. 3b5-6)、第 13 話は「是時王者即我身是。時夫人者今俱夷」 (大正 3. 7c22)、第 45 話は「童子者吾身是也。妻者俱夷是」 (大正 3. 26c3-4)、第 83 話は「妃者俱夷是」 (大正 3. 46a29) の句によって結ばれている。

⁸⁰ 「時妃者今瞿夷是也」 (大正 3. 424a15-16)

⁸¹ 「時婆羅門女者俱夷是」 (大正 3. 447c3)。

⁸² 「父王為立宮殿。納娶瞿夷」 (大正 3. 124c9)、「父王為納娶瞿夷」 (137a14-15)

⁸³ 「其女者瞿夷是。前世之結」 (大正 3. 75b16-17)、「婦瞿夷是」 79a27

⁸⁴ 「爾時后妃者今瞿夷是」 (大正 3. 427c17-18)

⁸⁵ 「彼時婦者。今瞿夷是」 (大正 4. 365b18)、「爾時妻者。今瞿夷是」 (415a24)、「夫人者今瞿夷是」 (504c18)

⁸⁶ 「時王者是我身。夫人俱夷是」 (大正 53. 54a18)、「即以瞿夷。為太子第一夫人」 (大正 53. 16a11)、「陶家女者即瞿夷也」 (42b23)、「大夫人者瞿夷」 (128a7)、「時夫人者今瞿夷是」 (139c27)、「后妃者今瞿夷是」 (162c21)、「妻瞿夷是」 (166c13)、「賣花女瞿夷也」 (211a26-27)。Cf. also (15c26-27, 113b8, 115c10-11, 174a20-21)。但し当然の事ながら、その引用の中には「耶輸陀羅」の名も現れる。「一角仙人我身是也。姪女者耶輸陀羅是也」 (大正 53. 210a18-19)。Cf. also (34a2-3)。

⁸⁷ 「瞿夷者是太子第一夫人」 (大正 53. 345c16)、「以女俱夷為菩薩妃」 (357a6)、「故納瞿夷釈氏之女」 (357b6)、「彼女人者今瞿夷是」 (728b8-9)、「大婦者瞿夷是」 (867b21)、「是時妃者今瞿夷是」 882b12-13。Cf. also 俱夷 (364a22)、瞿夷 (364b19, 991b14, 997c17)。但し当然の事ながらその引用の中には「耶輸陀羅」の名も現れる。「其太子妃耶輸陀羅」 (大正 53. 360c8)、「耶輸陀羅都無慙恥。正直而言」 (645a27)、「羅睺母耶輸陀羅為太子婦」 (452a20)。Cf. also (355c26-27, 361b27, 365b11, 828a29)。

⁸⁸ Cf. also 出曜經 25 (大正 4. 744b7ff)、根本説一切有部比丘尼毘奈耶「瞿卑夫人」 (大正 23. 902b18-19, 1018a9)。

⁸⁹ Peri, 31.

⁹⁰ 「有一大臣名為執杖。其人女名耶輸陀羅」 (大正 3. 561b13ff)、「是時耶輸陀

未曾有因縁経 (479-502)⁹³、佛所行讚⁹⁴、雑宝蔵経⁹⁵、鳩摩羅什訳法華経 (AD. 400-417)⁹⁶、衆許摩訶帝経 (AD. 982-1001)⁹⁷ 等⁹⁸、主として 5 世紀以後翻訳の仏典に見える⁹⁹。併し、他面この第一夫人 Gopā は「宝女」と言われて不妊の身とされるから、29 歳出家前に釈迦が第二夫人を迎えたとしても必ずしも不自然ではない。不妊の妻を替える得る事は法典の認める所であり¹⁰⁰、就中彼の属した王族 (Kṣatriya) 階級に在って子孫の確保は必要緊急事であった故である¹⁰¹。但し Gopā の父を Kinkiniśvara とする通常の伝承の傍らに、しばしば兩人とも Daṇḍapāṇi (執杖积種) を父となすとする文献も多いから、兩人はもと同一人で、伝承の間に混乱が生じたと立論する可能性も残されている。と言うのも、大乘仏伝 Lalitavistara 第 12 章 Śilpa-saṃdarśana-parivarta の梵文原典は菩薩の新婦である Daṇḍapāṇi (執杖大臣) の娘を常に Gopā と記しているが¹⁰²、その漢訳二篇の中、初期

羅亦夢二十種可畏之事」(571c16). Cf. also (555a19, 575c9-10, 578c7, 616a5ff.) (後出)

⁹¹ 「有一积種婆羅門。名摩訶那摩。其人育女。名耶輸陀羅」(大正 3. 629b14-15)、「時売花女者。今耶輸陀羅是」(大正 3. 653b15-16). Cf. also 636b13, 14-16.

⁹² 「復有五百諸积種女……耶輸陀羅而為上首」(大正 3. 692b2)、「积種大臣摩訶那摩。其女名為耶輸陀羅」(707c4-5)、「工巧之女。今耶輸陀羅是」(713c6. Cf. 712c9, 12, 17, 22. 713c9. 715b27. 727a24. 733a9. 735c10. 739a23, 29. 740b26. 796c13. 887b15-16, 20, 26. 888a22. 906a4, 20-21, 23)

⁹³ 「因復慰諭羅睺羅母耶輸陀羅」etc. (大正 17. 575b24etc.)

⁹⁴ 「容姿端正女。名耶輸陀羅」(大正 4, 4b24)、「時耶輸陀羅。深責車匿言」(15a19)。

⁹⁵ 「爾時善賢者。耶輸陀羅比丘尼是也」(大正 4. 454b10. Cf. also 496. 20ff.) (後出)

⁹⁶ 「羅睺羅母耶輸陀羅比丘尼」(大正 9. 2a1)。

⁹⁷ 「爾時有一童女。名耶輸陀羅」(大正 3. 942c16)、「出別之後。即令耶輸身有懷妊」(945c7)、「耶輸陀羅亦說八夢」(945c22)、「時耶輸陀羅忽然懷妊」(949a27-28)

⁹⁸ Cf. also 妙色王因縁経 「妻妙容者。即耶輸陀羅是」(大正 3. 391c15.)

⁹⁹ Peri, p. 31-32.

¹⁰⁰ Cf. Manusmṛti 9. 81

¹⁰¹ Cf. Peri p. 27.

¹⁰² Cf. Lalitavistara 140. 9, 141. 7, 142. 8, 20, 133. 7, 157. 4, 8, 159. 10, 14. Cf. also 230. 3, 11.

の普曜経(「試芸品」第十)は彼女の名前を梵文に従って常に「俱夷」と訳出しているのに対し、後期のより逐語的な方広大莊嚴経(「現芸品」第十二)はそれに替りに「耶輸陀羅」を以ってしている故である。梵文原典に見える唯一の名前に対するこの二つの異なった漢訳の訳語の存在は果たして何を意味しているのであろうか。恐らくは古訳と新訳の間に介在する370有余年の間に、中国に於いて「耶輸陀羅」の名が一般化して定着し、「俱夷」に取って替ったものと思われるが、「耶輸陀羅」がもと固有名詞ではなく、より一般的な多財積合成語の普通名詞(「榮光、名譽(yaśas)を保持する(dhara)女)に過ぎなかったと考える事も不可能でない¹⁰³。

次に「二人説」は、上記二夫人を同時併記の形で登場させるものであるが、それは大智度論に言及される「羅睺羅母本生経」(Rāhula-mātr-jātaka)の伝える処であった¹⁰⁴。

「三人説」は根本説一切有部毘奈耶卷第十八¹⁰⁵、同比丘尼毘奈耶¹⁰⁶、同破僧事卷第三¹⁰⁷、修行本起経(AD. 197)¹⁰⁸、佛本行集経(AD. 589)¹⁰⁹、衆許

¹⁰³ Cf. R. 7. 47. 18 (for Sitā.)

¹⁰⁴ Peri 29, Thomas 50, Lamotte II. 1002. Cf. also, 経律異相 7「悉達太子有二夫人。一名幼毘耶。二名耶輸陀羅。幼毘耶是宝女故不曾懷孕。耶輸陀羅以菩薩出家夜。自觉有娠」(大正 53. 34a2-4)。法苑珠林にもその事が引用されている。「如智度論云。菩薩有二夫人。一名幼毘耶。是玉女不孕。二名耶輸陀羅」(大正 53. 357a25-26)

¹⁰⁵ 「便捨宝女耶輸陀羅。瞿比迦。密伽闍等六万姝女、而為出俗」(大正 23. 720c12-14)

¹⁰⁶ 「棄捨宝女耶輸陀羅瞿比迦密栗伽闍」(952a16-17)、「其耶輸陀羅鹿母瞿昇此三為首」(908a27-28)

¹⁰⁷ 「爾時菩薩既至城内。有一积迦種。名不過時有其一女。名曰鹿王。於楼窓中遙見菩薩。讚歎頌曰……菩薩聞此涅槃聲。愛念歡喜。聞妙声故。即脫頸上珠環。擲於空中。以威力故。遂落鹿王女頸上。諸人見此皆大歡喜……淨飯王……迎鹿王女」と伝えられ、「彼時菩薩有三夫人。一名鹿王。二名喬比迦。三名耶輸陀羅」と結ぶが(大正 24 114b13-25)、その梵本にも同類の記述が見られ結論的に *iti tatra bodhisattvasya gopikā-mṛgajā-yaśodharā-pramukhāni śaṣṭi-strī-sahasrāny antahpuram abhūt* (Gnoli ed. Pt I p. 78 21-23) と結んでいる。

¹⁰⁸ 「有小国王。名須波佉。有女名裘夷……」(大正 3 465b17)、「一名衆称味。二名常樂意……三夫人者凡有六万姝女」(大正 3. 466a27-29)

摩訶帝経 4 (AD. 982-1001)¹¹⁰、十二遊経 (AD. 392)¹¹¹等¹¹²に伝えられ、上記二人の他に Mṛgajā (鹿野) を登場させている。彼女は通常有名な詩句¹¹³に連関して登場し、釈迦はその出家 7 日前に娶ったと謂われている。

併しそれよりも重大なのは一般に釈迦が Yaśodharā との間に儲けたと言われる一人息子 Rāhula¹¹⁴に関する伝承で、彼が何時生まれたか、即ち彼の誕生が父親仏陀の出家以前であったか、それともその後であったかの問題は仏伝文学によって伝承が異なっている¹¹⁵。古く Pali Jātaka (I. 62)、

¹⁰⁹「其第一宮。耶輸陀羅……第二宮中。摩奴陀羅……第三宮内。即瞿多弥……」(大正 3. 715b27-c3)、「有一婦人。名曰鹿女」(Mṛgī) : 724b22-23.

¹¹⁰「爾時太子有三夫人。耶輸陀羅。虞閉迦。蜜里譏惹 (Mṛgajā)」(大正 3. 945a2-3)。Cf. also (944c21, 945a1-3)。Cf. also Thomas, 54 note 1, Rockhill, 23-24 and Lamotte I 488 note 1 and II 1001 note 1

¹¹¹ 仏説十二遊経は三人の父の名をも伝えている。「瞿夷者是太子第一夫人。其父名水光長者。太子第二夫人生羅云者名耶惟檀。其父名移施長者。第三夫人名鹿野。其父名釈長者。以有三婦故。太子父王為立三時殿」(大正 4. 146c23-27)。Cf. Peri pp. 20-21 and 法苑珠林 9 (大正 53. 345c13-22)。又、翻譯名義集 3 にも「長者名水光。其婦名余明……因立字云瞿夷。即是太子第一妃也。第二妃生羅云。名耶檀。亦名耶輸……第三妃名鹿野。其父名釈長者。太子以三妃故」(大正 54. 1095b7-14) と伝えられている。

¹¹² 根本有部律の雑事卷第 20 : 「遂於三夫人処生厭離心。所謂午後夫人鹿養夫人名称夫人」(大正 23 299c13-14)

¹¹³ 「父得解脱樂 母身亦復然 生此悉達多 願與我為夫」(大正 3. 944c24-25)、「淨飯大王受快樂 摩訶波闍無憂愁 宮内姝女極姝妍誰能当此聖子処」(大正 3. 724b25-26)、「安樂乳母生 安樂父能養 彼女極安樂 当與汝為妻」(大正 24. 114b16-17)。

*sukkhīṭā bata sā mātā sukhī cāsya pitā hy asau
nīrvṛtā bala sā nārī yasyā bhartā bhaviṣyati
nīrvāṇa-sabdāṃ śrutvā tu dhyāyī sa puruṣottamaḥ
nīrvāṇe sāntatām jñātvā tasmimś cittam arocayat
(Saṃghabhedavastu, Gnoli Pt. 1 p. 78. 12-15)*

¹¹⁴ 但し或る伝承によると彼の上に 3 人の息子 Sirivaḍḍha、Kassapa of Gayā、Kāludāyin があつたと言われ、その際仏陀は 4 人の子持ちとなるが、ここにはもとより Pali *putta* の語義の問題がある。Cf. Thomas 59.

Buddhacarita (2. 46) はその誕生を仏陀の出家 7 日前とし、仏陀の Kapilavastu 帰還の折に彼は 7 歳であったと伝えているが、仏本行集経、大智度論、根本有部律はその誕生を仏の成道開悟の日と同じであるとなす。而して仏陀は出家して 6 年後に降魔成道するから、Rāhula の誕生も落胤後 6 年という事となり、ここに Rāhula の「六年胎住伝説」と関連する事となる¹¹⁶。又この伝承によれば仏陀の Kapilavastu 帰還は成道後 6 年と言われるから、父子の対面は Rāhula 12 歳の時となる。更に仏本行集経の Kāśyapīya の伝える別の伝承¹¹⁷ は仏陀出家時に彼を 2 歳であったとし、且つ仏陀の Kapilavastu 帰還を成道後 7 年とするから、息子の入門は 15 歳の時となる¹¹⁸。

のみならず、後世の伝承は釈迦の婚姻生活を精神化し、その中の或るものは彼が一子を儲けたのは自らの「不能男」の疑惑を払い¹¹⁹、以て「丈夫」(puruṣa) たる事を立証せんとする必要に迫られてなした行為であるとなし¹²⁰、又或るものは釈迦も神や偉大人の例にもれず、夫人の腹に指で触れただけで懐妊させたとも言っている¹²¹。

¹¹⁵ Cf. 並川、17-34.

¹¹⁶ Cf. Peri, pp. 23-24 (For Rāhulabhadrasya pūrvayoga mentioned in Mhv. III. 172-175 and Sūrya-Candra, Śaṅkha-Likhita, cf. Hara (1997) 256ff.) 佛本行集経巻第 55 : 「其羅睺羅。如来出家六年已後。始出母胎……」(大正 3 906b26-28)

¹¹⁷ 大正 3 908c and 909c24-27.

¹¹⁸ Lamotte 1001-1002

¹¹⁹ 太子瑞王本起経 (大正 3. 475a19)

¹²⁰ Cf. Peri, pp. 3 and 14.

梵行=不能

na hi dharmo 'sti te bhīṣma brahmacaryam idaṃ vrthā

yad dhārayasi mohād vā klībatvād vā na saṃśayaḥ (MBh. 2. 38. 24)

¹²¹ 過去現在因果経巻第二「而答王言。善哉如勅。即以左手指其妃腹。時耶輪陀羅便覺体異」(大正 3. 632b16-17, cf. Peri, p. 15)、太子瑞王本起経「太子以手指妃腹曰」(大正 3. 475a19)、妙法蓮華経文句巻第二上「太子求出家。父王不許殷勤不已。王言。若汝有子聽汝出家。菩薩指指妃腹」(大正 34 18c14-16)。Cf. also Peri p. 14, 拙稿 (1986) 94 and my "Divine Procreation—Milinda-panha 122-124—" in preparation.

ところで今、羅睺羅の誕生に纏わる諸伝説や、「胎住六年伝説」をさておくと、通常インドに在って胎住は9-10ヶ月とされるから、若し Yaśodharā が仏成道の日に Rāhula を産んだとすると、彼女は仏陀不在中に懐妊したこととなり、その結果当然の事ながら Rāhula 誕生に際して釈迦族の間に Yaśodharā 不貞の疑惑が起った。舅の浄飯王もこの風評を耳にして、嫁の貞操を疑い、生まれ来る孫が嫡子か否か憂いながら、彼女を一門の穢れとして糾弾した。一方、身に覚えのない嫌疑を受けた彼女は大いに苦悩し、身の潔白を証せんとして幾つかの手段に訴えた。後述する如く、大智度論は「歡喜丸」(modaka) の物語を伝え、又方広大莊嚴經卷第12は「歡喜丸」に替えるに「指環」を以てしているが¹²²、幾つかの伝承は神明裁判を伝えている。

その神明裁判の中には既述の Rāmāyaṇa の Sītā の「入火」に類するものがあるが、今一つ「水」によるものも存在する¹²³。併し、同じ神明裁判といっても仏典の場合は Rāmāyaṇa のそれと些か趣を異にして、耶輸陀羅の「入火」は Sītā の様に彼女自らが火の中に入るのではなく、釈迦族によって無理矢理火坑に投ぜられものが多い。のみならず、「入水」の場合でも、彼女が身の潔白を証する為に自ら入水するのではなく、寧ろ彼女が赤子を池に投げ入れて奇蹟を行ぜしめ、以て彼が仏の実子である事を証明する形を取っている。そこに我々は女性の貞節よりも、寧ろ息子の嫡子性の証明に重点が置かれているかの如き印象を受ける。尚、この耶輸陀羅不貞疑惑物語は北伝を主とし、南伝にはあまり伝えられていないようである¹²⁴。

何れにしてもこの釈迦の妻子にまつわる問題は複雑で、そのインドから中国、日本に至る伝承の整理は決して容易でないが、以下に E. Lamotte の大智度論仏訳の他、赤沼智善「印度仏教固有名詞辞典」、黒部通善、野村

¹²² 「時耶輸陀羅即指環与羅睺羅死而語之言。是汝父者以此與之……」(大正3 616a9-15)。但し普曜經第8は俱夷が羅に与えるに「信環」を以てしたとしている(大正3 536c14-16)。

¹²³ For Fire and Water, cf. Hopkins, 323-326.

¹²⁴ Thomas 48-50 (Bhaddakaccā). Cf. Malalasekera II 741-744.

育代氏の研究を頼りにそれらを分類すれば次の如くである。

(1) 「火」

以下に筆者の蒐集し得た限りのものを提示するが、最初の2は長文に亘るので大意を取り、関係部分の原文を注に載せる事とした。その他は短文であるので原文を提示して解説する形を取っている。

(1-1) 雜宝藏經卷第十(羅睺羅因縁)(AD. 472)

(要旨) 仏子羅睺羅は佛出家の夜に母の胎に入り、母は佛成道の夜に彼を出産した。それを知った宮中の子女は悉く彼女を不貞女と非難し、それは浄飯王の耳に達する。王は一門の汚辱として彼女に激怒してその殺害を諮るに彼等は火坑を掘って薪を燃やし、母子をその中に投入すべしと進言する。身に覚えのない不貞を咎められた彼女は火坑の前で児を抱きつつ菩薩を念じ、合掌して火に向かってこの児の六年在胎の真実を誓い、それが真実であれば火は母子を焼く事莫れと言って火に入る。すると火坑は変じて清池となり、彼女は顔色を変える事なくその中で蓮華の上に座す。この真実語の明かす所、身の潔白が保証され、浄飯王も相好を崩して孫を溺愛したと言う。その後羅睺羅は父と会見して再び奇蹟を現じ、佛はその頂を撫でた¹²⁵。

ここで耶輸陀羅は不貞の嫌疑に対して「火」による神明裁判に拠っているが、それは自発的なものでなく、他による強制の形を取っている。不貞な女は火刑に処せられる道理であるから、その窮地に於いて彼女は菩薩の慈悲に縋り、「真実語」による誓を述べ、その結果身の潔白が証明される¹²⁶。

¹²⁵「我昔曾聞。佛初出家夜。仏子羅睺羅。始入于胎……於初成道夜。生羅睺羅。拳宮姝女。咸皆愧恥。生大憂惱。而作是言。怪哉大惡耶輸陀羅。不慮是非。輕有所作……時有積女。名曰電光。是耶輸陀羅姨母之女。椎胸拍髀。瞋恚呵罵……女曰王言。太子不死。耶輸陀羅今産一子。拳宮慙愧」(大正 4. 496b13-24)

¹²⁶ 法苑珠林 47 (大正 53. 645a8ff.), Chavanne III 136 and Lamotte 1002 note.

(1-2) 大智度論卷第 17 (AD. 402-405)

(要旨) そこには「羅睺羅母本生経」の説として次の様に言われている。菩薩に二夫人あり、劬毘耶と耶輸陀羅、前者は宝女にして子を孕まなかったが、後者は菩薩出家の夜に懐妊した。菩薩の六年苦行中、彼女は懐妊したまま出産する事がなかったが、釈迦一族は彼女の懐妊を見てその不貞を疑い、浄飯王に彼女の処罰を請う。一方彼女は太子の体胤と主張して譲らなかったから、例の「宝女」とされ、常に彼女と行動を共にしていた第一夫人劬毘耶は彼女を弁護し、赤子誕生の暁に子が父に似るか否かで判定すればよい、と言って決着を将来に持ち越させる。その後、菩薩成道の夜に赤子は誕生し、父に似る故に祖父の王は満足するが、人民の疑惑は未だ容易に治まらない。そこで佛の Kapilavastu 帰還の折に耶輸陀羅は、7 歳になった羅睺羅に「歡喜丸」を与えて佛に献上させる。佛は神通力によって五百の阿羅漢を変じて佛身の如くにして幼児を惑わすが、羅睺羅は誤たずに佛鉢の中に「歡喜丸」を満たしてその実子たる事を証明した。その後、耶輸陀羅は更に佛に彼女の六年懐妊の理由を聞くと、佛はそこで Sūrya-Candra, Śaṅkha-Likhita¹²⁷ の故事を物語った¹²⁸。経律異相卷第七「羅睺羅処胎六年 五」は上記智度論の趣意を取って簡潔に伝えている¹²⁹。

ここでも彼女は不貞嫌疑を蒙るが、上の様な残酷な「火」による神明裁判は語られない。羅睺羅の在胎六年説は既に前提され、その嫡子性は「父に似る事」と「歡喜丸故事」によって証明されるが、浄飯王の不機嫌はさらに語られない¹³⁰。物語は耶輸陀羅による更なる佛誘惑に及び、その無効を語る間に有名な独角仙人の故事が紹介される¹³¹。

(1-3) 法苑珠林第十、疑謗部第四 (AD. 668)

(漢訳) 「如智度論云。菩薩有二夫人。一名劬毘耶。是王女不孕。二名耶輸陀羅。菩薩出家。夜有人言。太子出家何得有娠。汚辱我門積種欲以火

¹²⁷ Lamotte 1006 note 1, Hara (1997) 256-258.

¹²⁸ 大正 25 182b12-182c20. Cf. Peri 22, Lamotte 1001-1007.

¹²⁹ 大正 53. 34a1-29.

¹³⁰ 「王見其似父。愛念忘憂」(大正 53. 34a12)

¹³¹ Cf. Peri 24-27.

坑焚燒母子。耶輸自恨無事立大誓言。我若邪行其腹内兒。願母子隨火消化。耶輸發此願已即投火坑。於是火滅母子俱存。火變蓮池母処華座。知實不虛。後生兒似菩薩身。父王大喜。作百味歡喜丸奉佛……」（大正 23. 357a25-b3）

智顛は智度論によって菩薩に二人の妻のあった事と、耶輸陀羅が妊娠して一族は一家の穢れと非難した事を伝えるが、毘毘耶はここで弁護に登場せず、その替わりに衆議一決、母子共々火坑に投じて焼殺せんとする残酷物語を載せている。彼女は身の潔白を誓い、火が母子を絶対に焼かないようにと言って火中に身を投じる。火は兩人を焼かず、火坑は変じて蓮池となり彼女は蓮華の上に座し、これによって身の潔白が証明され、舅の大王は大いに喜んだと言う。この法苑珠林は上記の二つを折衷した形を取っている如くである。

(1-4) 妙法蓮華經文句卷第二上 (AD. 593)

(漢訳) 「真諦三藏云。羅睺。本名修羅能手障日月翻此応言障月。仏言。我法如月。此兒障我不即出家。世世障我。我世世能捨故言覆障。仏出家後耶輸有娠。諸積成瞋何因有此。欲治欲殺惡声盈路。宝女毘毘羅証此小差。因焚火坑發大誓願。我若為非子母俱滅。若真遺体天當為証。因抱子投坑。坑變為池蓮華捧侍。王及国人始復不疑……」（大正 34 18c17-25）

ここには先ず羅睺羅命名の由来をその語源に徴して説き明かしてから、大智度論に従って耶輸陀羅の妊娠と出産に纏わる世間の悪評、宝女毘毘羅の故事に関説しつつ、火坑投入の残酷物語を伝える。彼女は身の潔白を宣誓し、子を抱いて火中に身を投じるが、火坑は変じて池となる。この奇蹟によって一同納得となり、物語は更に「歡喜丸」故事に続く。智顛は恐らく真諦三藏の大智度論の記述に拠りつつも、そこに火による神明裁判の故事を混入したものと思われる。

(1-5) 太子成道經 (敦煌變文)

(漢訳) 「已經十月、耶輸降下一男。父王聞之、拍案大怒。我兒雪山修道、不經一年已來、新婦因何生其孩子。遂遣武士殿前。穿一方丈火坑、滿坑著火、令推新婦並及孩子入火坑。大王發願、實是朕之孫子、令推火坑、變作清涼池。大王發願已訖、便令武士推去新婦兼及孩兒。臨推入火坑之時新婦索香炉發願、甚道。

却喚危中也大危、雪山会上亦合知

賤妾者一身猶乍可、莫交辜負一孩兒

發願已訖、武士推新婦及以孩兒、便令入火推、入火已。其火坑、世尊以慈火照、變作清涼之池。池内有椽蓮花、母子各座一椽……」(敦煌變文集上集〔人民文学出版社 1957 北京〕pp. 295-296)

ここに、羅睺羅六年在胎の筋を欠くが、耶輸陀羅出産の折に淨飯王が激怒して家臣に火坑を掘らせ、火をつけて母子共々その中に投げ込んだ物語は上と同じ。但し、ここで誓願は大王の口より発せられ、若しこの児が自分の孫であれば、火坑変じて清涼池となれと宣言し、彼女は唯世尊の慈悲に頼るのみである。奇蹟が起こって母子は夫々蓮花の上に座していたと言われる。

(1-6) 真言伝巻二

(漢訳) 「羅睺羅尊者、其母耶輸陀羅女胎、有時。耶輸陀羅積衆タルニヨリテ。火坑中投ラル。羅睺羅母胎中有。隨求陀羅尼憶念シカバ火坑變蓮華池ナリキ。是經火不能燒現証出セリ」(大日本仏教全書 68 史伝部 7 506 [p. 11a])¹³²

ここに、不貞の疑惑を受けた彼女は妊娠の身のまま釈迦族により火中に投げ入れられる。胎児が憶念すると火の穴は蓮池に変じたとと言われる。この話では羅睺羅は猶未だ母親の胎内に在り、發願の主は母でも、淨飯王でもなく、胎児自身となっている。

(2) 「水」

(2-1) 佛本行集經卷第五十一 (AD. 516)

既述の如く耶輸陀羅は不貞嫌疑を蒙って一族糾弾の的となり、人々は口々に彼女を罵って、9種の残酷な死刑執行法を提案したが(大正3 888c12-21)、彼女は身の潔白を証するために息子を菩薩に由緒ある石に乗せて水中に投げ入れる。

(漢訳) 「菩薩往昔在家之日。恒於彼苑。按摩遊戲。彼苑之内有一大石。

¹³² 黒部、p. 164 注3

菩薩往日於上坐起。耶輸陀羅積種之女。當於爾時。將羅睺羅。臥息彼石。於後捉石擲著水中。遂立誓言。我今要誓。如實不虛。唯除太子。更無丈夫。共行彼此。我所生兒。實是太子體胤之息。是不虛者。令此大石在於水上浮遊不沒。時彼大石。如彼要誓。在於水上遂即浮住。如芭蕉葉浮於水上。不沈不沒……」(大正 3 889b3-11)

その昔、菩薩出家以前王苑に大きな石があり、彼はしばしばこれに乗って遊んでいた。耶輸陀羅はそれを思い出して、息子羅睺羅をこの石の上に乗せ、それを池の中に投げ入れる。そして若し自分が貞操を守りこの児が菩薩の実子であれば、この石は水没する事なかれと誓って言う。ここに奇蹟が起り石は水上に恰も芭蕉の葉の如く浮いて沈む事がなかった¹³³。

(2-2) 法苑珠林第十 (AD. 668)

この佛本行集經の記述は法苑珠林に引用されている。

(漢訳) 「又佛本行經云……菩薩往昔在家之日。常於彼苑按摩遊戲。彼苑之內有一大石。菩薩往日於上坐起。耶輸陀羅積種之女。當於爾時將羅睺羅臥息彼石。於後捉石擲著水中。遂立誓言。我今安誓如實不虛。唯除太子更無丈夫共行彼此。我所生兒。實是太子體胤之息。是不虛者。令此大石在於水上浮遊不沒……在於水上遂即浮泛。如芭蕉葉浮於水上。不沈不沒亦復如是……」(大正 53 357b8-20)

菩薩がその昔、苑に於いて親しんだ大きな石があったので、彼女は息子をその石に乗せて池の中に投げ込んだ。そしてこの児が菩薩の実子であれば石は浮き、然らざる場合は沈むべしと誓を立てる。石は沈まず芭蕉の葉の如く水上に浮いたと言われる。

(2-3) 根本説一切有部毘奈耶破僧事卷第五 (AD. 710-711)

(漢訳) 「時淨飯王。觀羅怛羅而作是言。此非我積迦牟尼所生之子。時耶輸陀羅。聞王此語深懷恐懼。即携羅怛羅。往菩薩澡洗池邊。有一大石。先是菩薩力戲之石。以羅怛羅置此石上。合掌誓曰。此兒若是菩薩親生子者。投於池中不至沈沒。若非菩薩親生子者。入水即沒。作是願已。即抱其石并羅怛羅拋於池中。石便浮水。時羅怛羅落在水中。坐於石上。如輕綿在水隨

¹³³ Cf. Peri, p. 18.

波来去。曾不沈没。淨飯王聞已生希有心。將諸群臣圍繞侍衛。至彼池傍見羅怛羅。在於池中坐浮石上。歡歎喜悅。時淨飯王。自入池中抱羅怛羅。其石便没」(大正 24. 124c)

母は子を石と共に池の中に投げる。石は浮き子はその上に坐った。綿の如く軽く嘗て沈む事がなかった。祖父は池の中に入って孫を抱く。其の途端石は沈んだと言われる¹³⁴。

(2-4) 根本説一切有部毘奈耶破僧事第十二 (AD. 710-711)

(漢訳) 「佛在室羅筏城。若彼菩薩踰城出外。當爾之時。耶輸陀羅即便有娠。菩薩六年苦行。耶輸陀羅。於王宮中亦修苦行。由是因緣胎便隱腹。是時菩薩知苦行事無有利益。即便隨意氣息長舒。遂餐美食。粳米雜飯飽食資身。以油塗体温湯澡浴。耶輸陀羅聞是事已。宮中亦復放縱身心。事同菩薩。由斯快樂。胎遂增長其腹漸大。釈氏聞已笑而譏曰。菩薩出家極修苦行。汝於宮内私涉余人。致使懷娠腹便增大。耶輸陀羅聞而誓曰。我無此過。未久之間便誕一息。當此之時。羅怛羅執持明月。集諸眷屬慶喜設會。請与立字。諸眷屬等共相議曰。此所誕子初生之時。羅怛羅手執於月。応与此兒名羅怛羅。時諸釈種共相談曰。此非菩薩之子。耶輸陀羅聞此語已。即便啼哭。抱羅怛羅自為盟誓以羅怛羅置於菩薩。昔在宮中解勞石上。擲置菩薩洗浴池中。而發誓言。此兒若菩薩之胤。入水便浮。必若此虚乘當沈没。作是言已。其羅怛羅與石俱浮。不沈於下。耶輸陀羅復告之曰。宜從此岸至於彼岸。還可復來隨意便至。衆人見之咸生希有」(大正 24 158c13-159a8)

その時釈迦族は皆これは菩薩の子ではないと非難した。母はこれを耳にして慟哭し誓を立てる。潔白なればこの子は浮く、不貞なれば沈む。子は石と共に浮いた。母は更に子にそのまま向こう岸まで行くようにと告げると、彼は自由に往復したと言われる。

この漢訳部分は次の梵文にほぼ一致している。

¹³⁴ この方法は玄奘の大唐西域記の伝える所と一致している。「水則罪人與石盛以連囊。沈之深流校其真偽。人沈石浮則有犯。人浮石沈則無隱」大正 51 877c 1-3. Cf. Kane 376 note 591. 水谷 68-69.

yam eva divasaṃ bodhisattvo nirgatas tam eva divasaṃ yaśodharā āpanna-
sattvā samvṛttā; yadā bodhisattvo duṣkarāṇi carati tadāntaḥpuraṃ api
duṣkaraṃ caritum ārabdham; yaśodharāyāḥ sa garbho layaṃ gataḥ; yadā
bhagavān niṣkiñcanaṃ duṣkaram iti viditvā yathāsukham āśvasiti,
yathāsukhaṃ praśvasiti, odārikam āhāram āharaty odana-kulmāṣam, sarpi-
tailābhyāṃ gātrāṇi mraṅśayati sukhodakena ca kāyaṃ pariśiñcati; antaḥpur-
am api tadā yathā-sukham āśvasiti, yathā-sukhaṃ praśvasiti, odārikam
āhāram āharaty odana-kulmāṣān, sarpi-tailābhyāṃ gātrāṇi mraṅśayati,
sukhodakena ca kāyaṃ pariśiñcati; tadāsau garbhaḥ punar api puṣṭim
gataḥ; tasyā garbha-nimittāni prādurbhūtāni; sā sākyaiḥ saṃparihāsam
ucyate; tvam bodhisattve tapo-vanaṃ gate vyabharitā iti; sā kathayati:
śāntaṃ pāpaṃ nāhaṃ vyabharāmi; kathaṃ jñāyate? yuṣmākaṃ praty-
āyayīṣyāmi; yāvad asau prasūtā, dārako jātaḥ; yam eva divasaṃ jātaḥ tam
eva divasaṃ rāhuṇā candro grhītaḥ; tasya jātau jātim aham kṛtvā
nāmadheyam vyavasthāpyate; kiṃ bhavatu dārakasya nāma iti; tasya
jñātayāḥ kathayanti: asya janmani rāhuṇā candro grhītaḥ tad bhavatu
dārakasya rāhula iti nāma iti; jāte kumāre bhūyasyā matrayā śakyā vibruvate
eva; tayāsau sātvyopācanaṃ kṛtvā rāhula-bhadro bodhisattvasya vyāyāma-
śilāyāṃ sthāpayitvā krīḍā-ṣuṣkarīnyāṃ āplāvitaḥ: yady ayam bodhi-sattvena
jātaḥ plavatām iti; pravritum ārabdhaḥ; sā kathayati; pārād apāram
āgacchatu iti; sa pārād apāram āgataḥ; te vismayam āpanmāḥ; yaśodharā
kathayati: bhūyo 'pi bhavatām pratyakṣikarīṣyāmi yathāyaṃ bodhi-sattvena
jātaḥ, nāhaṃ vyabharitā iti (Gnoli 30-31)

(邦訳) 菩薩踰城と同じ日に、耶輸陀羅は懐妊した。菩薩苦行の間は後宮も苦行した。胎児も成長停止。世尊が苦行の空しきを知り、断念すると彼女も安心安堵し、食事進み飯や豆を食う。酢油にて身体を塗油し、快く沐浴なす。後宮も彼女同様快適にする。その時胎児も成長し妊娠の兆しが彼女に顕れる。すると釈迦族は彼女を揶揄する。「汝は菩薩苦行林に在る間、不倫したに相違ない」と。彼女答える。「と

んでもない。不倫などしていない。どうしてそんな事を言うのか。貴方方を信用させよう。彼が嵐を降ろしてこの子誕生。誕生の日に月蝕。誕生日に誕生祝として命名す。それならこの子の名は如何。彼の親族曰く。彼誕生するや月蝕起こる、されば Rāhula の名あり。しかしそれでも生れた王子に対して更に釈迦族は抗議。そこで彼女は真実祈願なし、Rāhula を菩薩の訓練石に載せ、遊園池に浮かばせて曰く、「若しこの子が菩薩の子なら、浮んで帆走すべし」と。彼帆走す。母曰く「此岸より彼岸に進め」と。彼此岸より彼岸に至る。彼等驚愕。耶輸陀等曰く「彼は菩薩の子、我不倫せず」の証拠をもっと示しましょう」と……

(2-5) 同類の記述は Avadānakalpalatā にも言及されている。

(2-5-1) その中で、極めて簡略化されて伝えられているものの関連部分のみ紹介すれば以下の如くである。

*putras tavāmṛtaṃ pītvā samyak-saṃbuddhatāṃ gataḥ
tenāvalokitasyāpi nāste mṛtyu-bhayaṃ kutah (70)
iti sāntaḥpurāmatyaḥ. śrutvā naraṇpatir vacaḥ
abhūt pratyāgata-prāṇaḥ sudhāsikta iva kṣaṇāt (71)
tasmin mahotsavānande bodhisattva-vadhūḥ sutam
kāntaṃ yaśodharāsūta rāhu-graste miśākare (72)
rāhulākhyah sa bālo 'pi nṛpater janma-śankinaḥ
jananyā saśilāḥ śuddhyai nikṣipto 'mbhasi puṭluve (Avadānakalpalatā 25.
73)*

マールは、菩薩が激しい苦行の末、遂に死んだと触れ回ると、浄飯王は失神し、後宮の美女達も、王と共に菩薩の後を追う決心をする。すると天より声あり (67-69)

「汝の息子は甘露を飲んで（不滅の世界を見て）正しい悟りに達した故に、彼にどうして死の恐怖などあるであろうか」 (70)

この言葉を耳にして、恰も甘露に灌がれた如く、忽ち大王は後宮大臣
共々起死回生の思いであった。(71)

この大歓喜の最中、月蝕の夜に耶輸陀羅は美しい息子を産んだ。
(72)

併し大王は(この児の)誕生に纏わって嫌疑を懐いたので、母親の潔
白を証する為に羅睺羅と名付けるこの児は、石を懐いて水中に投入さ
れたが、浮上した。(73)

(2-5-2) 第二のものはその 68 章、Padmāvaty-avadāna の序章部分
に語られる。

tvad-viyogāgni-saṃtaptā bhagavan kuṅṅi-koṭhale
nīlīnaṃ suśuve garbhaṃ ṣaḍbhir varṣair yaśodharā (3)
tasmin rāhulakābhikhye jāte tvat-saḍṛṣe śīśau
jātaḥ kuto 'yam ity āha rājā śuddhodanaḥ krudhā (4)
sā vadhya-vasudhām nīlā śāsanena mahīpateḥ
satī tavaiva lekheṇa prabhāvenaiva rakṣitā (5)
tvad-vyāyāma-śilotsaṅge nikṣipte 'tha tayā śīśau
tat-satya-yācanenāsau salile puṣṭiḥ silā (6)
sādhvī-vrata-pavitṛyās tasyā śvaśura-kopajāḥ
duḥkhāvamāna-saṃtāpaḥ sa pākāt kasya karmaṇaḥ (7)
iti bhikṣu-vacaḥ śrutvā bhagavān pratyabhāṣata
śrūyatāṃ karmaṇā yena duḥkhaṃ lebhe yaśodharā (Avadānakalpalatā 68.
8.)

卿との別離の火に苦しんだ耶輸陀羅は、
六年間隠していた胎児を産み落した。(3)

羅睺羅と名付けるこの卿に似た子が誕生した時、
浄飯王は怒って「一体これは誰の子だ」と言った。(4)

彼女は王の命令で刑場に連行されたが^{s135}、

卿の威徳は¹³⁶貞節な彼女を護った。 (5)

彼女はこの子を、卿が(以前)体操に用いた石の上に置くと、
彼女の真実への願いが叶って、この子は水上に浮い(て、嘗て沈む事が
なかつ)た。 (6)

「貞女の誓を浄化の具としている彼女が、舅の怒りに発した
困難な恥辱の苦しみを味わねばならなかったのは、抑々如何なる(以
前の)業の異熟であるか」 (7)

と比丘の言葉を聞いて聖者は答えて言った。

「如何なる(以前の)業によって耶輸陀羅が苦難を経験せねばならなかつたか、その因縁を聞き給え」 (8)¹³⁷

ここに Padmāvātī は Yasodharā の前身であったと言われているが、両者の結びつきはこれのみに尽きない。Mañicūḍāvadāna は散文部 (72)、韻文部 (126) 共両者に言及しているのみならず¹³⁸、そのネヴァーリ語版もそれを伝えている¹³⁹。

yā cāsau Padmāvātī devī tena kālena tena samayenaṣaivāsau Yaśodharā devī (72: p. 98 7-8)

Brahmadattābhido yo 'sau Śuddhodanaḥ pitā mama (456cd)

kāntimatī mahāmāyā Padmāvātī Yaśodharā (457ab: p. 187)

のみならず、Paññāsa-jātaka (ed., by P. S. Jaini) vol. 2. 461-477 にも Padumā が Yasodharā の前身であった事が語られている¹⁴⁰。

(2-6) 同類の物語が Mahāvastu の中の Padmāvātī 本生の序章にも述べ

¹³⁵ Cf. 下記 Mhv. III 153 1-2. etc.

¹³⁶ (*lekhena?*)

¹³⁷ Cf. 引田 91-102.

¹³⁸ Handurukande 98 7-8 (72) and 187 14 (126 [457])

¹³⁹ Cf. Lienhard 102.

¹⁴⁰ Cf. Mette 225 note 4.

られている。

bhikṣū bhagavantam āhamsuḥ/pāśya bhagavan katham iyaṃ yaśodharā rājñā śuddhodanena ananuyujyitvā aparyavagāhitvā anaparādhi vadhyā ti osrṣtā (Mahāvastu Ī 153 1-2=/=3-5 and 170 6-9)

比丘達は世尊に質して言った。「一体何故にこの無実の耶輸陀羅は浄飯王により、喚問される事もなく、精査される事もなしに処刑に値すると言って追放されたのか」

この物語に於いて、耶輸陀羅の不貞疑惑は恰もその大前提となっている如くである。

(2-7) 衆許摩訶帝經卷第六 (AD. 985-994)

(漢訳) 「耶輸陀羅。生子之時月有蝕障。名羅護羅。時浄飯王言耶輸之子非仏之種。耶輸聞已恒懷憂惱。王宮後園池岸一石。名菩薩石。羅護羅坐石作戲。母忽見之而立誓言。若是仏種願水不溺。如非仏種即沈水下。作是誓已。以手推石子亦墮落。石浮水面子猶作戲。時浄飯王。与諸眷属来岸上。見子如是心大歡喜。讚言。善哉甚希有。爾時大地振動。仏光普照幽闇之处。所有衆生互得相觀。婦命頂礼」(大正 3. 950c27-951a7)

舅の浄飯王は彼女を疑う。彼女は苦悩する。王宮の苑に池あり、その岸に菩薩石と名付ける石があった。羅護羅がこれに戯れるのを見て母はこの児が菩薩の実子であれば、この石は浮き、然らざる場合は沈むであろうと誓を立てる。石は沈まず児はその上で猶戯れ続ける。これを見て一同歡喜し奇蹟が起こった。

(3) 古典インド法典の規定する所では、通常「水」による神明裁判は、誓う所が真実であるならば宣誓者は沈み、その発言が虚偽であるならば浮くとされる。水の浮力の自然が然らしめるところが「虚偽」となり、それに反するところが奇蹟となって「真実」の立証となるのであるが^{s141}、この仏典の記述は「石」を登場せしめて寧ろ「浮く」事の方に「真実」を帰し

ている。ここで奇蹟は水上に「石」が浮くという事実であり¹⁴²、それが真実の立証となっている。

従来東アジアで知られていたこの耶輸陀羅の不貞疑惑物語は、インドの叙事詩 Rāmāyaṇa の Sītā のそれと比較されるが¹⁴³、同じ貞女の貞節宣誓でも、それを取り巻く前後の文脈がかなり異なっている。Sītā は自ら進んで「入火」して火神 Agni よりその潔白の保証を得るが、耶輸陀羅の「入火」は自発的なものではなく、他の強制の結果であり、時には母子共々火中に投げ込まれる。「貞節宣誓の主」も不貞嫌疑を受けた耶輸陀羅本人のみでなく、時に舅の大王であったり、又時に胎内の胎児羅睺羅であったりする。併し「火」による神明裁判の決め手が「不焼」の事実にある事は古典インドの法典や物語と同一であり、仏典に在ってしばしば「火坑」は更に「清涼池」に変じた。

この仏典の不貞疑惑は主として漢訳仏典に伝えられ、インドの故地には僅かに根本有部律の梵文原典と Avadānakalpalatā に見られるのみである。併し貞節立証の神明裁判を載せる梵文は「火」によるものでなくて、寧ろ「水」によるものを伝えている。従って梵文原典に関する限り、「火」を盛る叙事詩と、「水」を盛る仏伝には尚かなりの隔たりがある。もと、叙事

¹⁴¹ Cf. Lariviere 13: "nature of the elements."

¹⁴² 「首に石を巻いて海を泳ぎ渡る」事が絶対不可能な事とされ、それが自滅に通じるとは、Arjuna 必殺を豪語する Karṇa に嫌味を言う Śalya の文言に見える。

*samudra-taraṇam dorbhyāṃ kaṅṭhe baddhvā yathā śīlām
giry-agrād vā nīpataṇam tāḍṅk tava cikīrṣitam (MBh. 8. 27. 25)*

石を首に巻いて両腕で海を渡るに等しく、

汝の為そうとしている事は山頂より飛び降りる様なものだ。

Cf. also MBh. 4. 44. 15 (*kaṅṭhe baddhvā mahāśīlām samudraṃ pratared dorbhyāṃ*)
瓢箪が沈み、石が浮上する。

*majjanty alābūni śīlāḥ plavante muhyanti nāvo 'mbhasi śācivad eva
mūḍho rājā dhṛtarāṣṭrasya putro na me vācaḥ pathya-rūpāḥ śṛṇoti (MBh. 2. 59. 11)*

尚、「首に石を結っても不沈」については、MBh. 1. 166. 44、「火も不焼」については MBh. 1. 166. 43 (Vasiṣṭha) 参照。

¹⁴³ Cf. 野村、71-88.

詩のモチーフが何らかの形で仏典に影響したと思われるが、前者の后者への直接的な影響を論じるには尚資料不足となっているのが現状である。

2. 貞女の前世想起物語 (Viṣṇu Purāṇa 3. 18. 53ff.)

Viṣṇu Purāṇa 3. 18 は正統ヴィシュヌ教徒に、*nagna*、*pāṣaṇḍa* と称せられる異端者との接触の過難を説く。ヴェーダ聖典は謂わば「衣」であり、それを欠く者は「裸」であるとされるが、ここに異端者とは具体的にジャイナ教徒と仏教徒を指している。彼等との接触が如何に危険であるか、それは会話しただけでも恐ろしい結果を齎す次第を貞女の物語に事寄せて物語る。以下に該当部分を訳出して、ヒンズウ教の立場からする「正統と異端」の一側面を窺うよすがとする。

聞く所によると、その昔この地に Śatadhanu と名付ける王あり、
彼にはその行い殊の外正しく心掛けの良い Śaibyā と言うお妃があった。
(53)

彼女は夫に貞節で、人品卑しからず、正直、清純にして情に厚く、
一切の美点を具え、しかも又礼儀正しい女性であった。
(54)¹⁴⁴

ところでこの王は、彼女と共に神の中の神である Janārdana を、
心を籠めて崇拜していた。かの全能の神を。
(55)

各種の護摩、祈禱、更に布施、断食により、献身的に、
又各種の供養により、来る日も来る日も一心不乱に心を籠めて。
(56)

ところが、或る時この夫婦は、共々に沐浴を済ませ、
Kārtikā 月の満月の日に、断食してガンジス川より上がった時、
偶々こちらに向かって来る異端の者 (*pāṣaṇḍin*) に出会った。
(57)

¹⁴⁴ 異読は *vinayena nayena ca* を挙げるが、この種の連合は稀有である。通常はその逆 *naya vinaya* となる。この連合に就いては拙稿 2004, 44-49. *vinayena nayena* の読みを採用すれば「行儀がよいが、さりとして (堅物に非ず、) 適度に処世の智慧を働かしていた」の義となろう。

- 彼は、この気高い王の弓の師範の友人であったので、
敬意を払う意味で (王は) 彼と会話を交わしたのであった。 (58)
- でも、彼の配偶者であるお妃の方は、沈黙の戒堅固に誓を守り、
彼と出会っても、「断食中です」とて、ただ太陽を見つめるのみであっ
た。 (59)
- この夫婦は、仕来たりに従って一緒に帰還し、
儀規に則って Viṣṇu 神の供養その他一切を執り行なった。 (60)
- 時経て、敵を圧するこの王は死んだが、
お妃は、火葬の薪の上にある夫王の後を追っ (て殉死し) た。 (61)
- 併しかの王は、自分の犯した過ちの故に (次世に) 犬となって生れた。
というのも、彼は断食中の身で異端の者と会話したからである。 (62)
- 一方、かの清純な彼女は、前世の記憶 (*jāti-smara*) を保持しながら
Kāśi 国王の王女として誕生した。
- 一切の技芸 (*viñāna*) を身に付け、一切の瑞相に荘嚴されて。 (63)
- 父王は、彼女をお嫁にやろうと思ったが、断念せざるを得なかった。
というのも、この美しい娘が、父王に結婚計画を止めさせた故である。
(64)
- それから彼女は天眼 (*divya cakṣus*) によって、自分の夫が犬になっている
のを見て、
Vidīśa の都に赴き、そこにその様な状態になっている夫と再会した。
(65)
- 夫がこの様に犬となっているのを見るや否や、この福德大なる女性は
好意を籠めて彼に、清潔にして上等な食べ物を与えた。 (66)
- 彼女の呉れた美味しい食べ物を嬉しそうに喜んで食べながら、
彼は犬らしく (*śva-jāti-tātita*) じゃれついて、愛嬌 (*cātu*) を振りまいた。
(67)
- 彼が愛嬌を振りまくのを見ると、彼女はすっかり恥かしくなって (*vri-
dita*)、
この畜生の胎に生れた、愛しい夫に敬意を払って次の様に言った。
(68)

妻曰く。

「大王様、貴方が（この様に）慇懃にじゃれついておいでの事をよくよくお考え下さいませ。と言うのも、貴方は犬の胎に落ちて（今）私の前で愛嬌を振りまいていらっしゃるのですから。 (69)

巡礼地で沐浴した直後に、異端の者と会話したばかりに、貴方は今汚らわしい胎にお生まれになったのです。大王様、思い出されませんか」 (70)

パラージャラは言った。

この様に彼女によって前世に為した事を思い出させられると、彼は暫し考えて、えもいわれぬ自己嫌悪に陥った。 (71)

すっかり嫌になってしまった彼は、それから都の外に出て、高みから投身自殺を計り、次いで野干の胎に生まれた。 (72)

一方彼女は、その後二年が経過した後、天眼によって夫が野干になっているのを知り、彼に会う為に騒々しい或る山に赴いた。 (73)

そこでも又、夫が野干の胎に落ちているのを見て、四肢麗しきこの王女は夫に向かって次の様に言った。 (74)

妻曰く。

「帝釈天の如き王様、（以前）犬の胎にお生まれになっていた貴方に私が申し上げた

あの異端の者に話掛けられた以前の御行為を御記憶でいらっしゃいますか」 (75)

パラージャラは言った。

再度、彼女に言われると、約束を守る事において人後に落ちないこの王は、

それが真実であったと理解して、彼は森の中で食を絶ち、命を捨てた。 (76)

その後、又しても夫が人気なき森に狼となって誕生しているのを知って、そこに行き、

この非の打ち所なき女は、夫に以前の所行を想起させた。 (77)

「福德大なるお方よ、貴方は狼ではなく、シャタダヌ王であります。以前犬となり、次いで野干となり、今又狼となっていられっしやるのです」 (78)

バラージャラは言った。

自分自身の事 (*atman*) をはっきり想起させられた彼は、次に禿鷹となって再生した。

貞操堅固な、美しい彼女は今一度彼 (の本性) を悟らせた。 (79)

「帝釈天の如き王様、御自身の事 (*atman*) を思い出した下さいませ。禿鷹の御振舞いなどなさいません様に。

(今) 禿鷹となっておられるのは、異端の者と会話なされたのがいけなかったのです」。 (80)

次の生に彼は鴉となつ (て生まれ) たが、美しい彼女は

自らの神通力によって (*yoga*) (それを) 知り、夫に向かって次の様に言った。 (81)

「以前、その支配下にあった諸国の王が、挙って朝貢 (*bali*) していた貴方様は、

今鴉となって餌 (*bali*) を啄ばんでおられるのです、王様」 (82)

バラージャラは言った。

鴉の身でこの様に過去を思い出された王は、

命を捨て、次いで孔雀となって再生した。 (83)

孔雀となって再生した時、清らかな彼女は彼に付き添った。

毎時、少女は孔雀の食べる柔かい食事を与えて。 (84)

さて一方、Janaka 王は馬祀大祭を催して、

彼の最終沐浴に際して、その時彼をも沐浴させた。 (85)

四肢美しい彼女自身も沐浴したが、今回も彼女は彼に思い出させた。

もと王であった彼が、犬や野干等の胎に生まれた経緯を。 (86)

すると再生の次第を想起した彼は自分の肉体を捨て、

今度はこの同じ偉大な Janaka 王の王子となって誕生した。 (87)

すると、かの美しい彼女は、父親に結婚させて下さいとせがんだ。

父親はそこで彼女の婿選びの儀式 (*svayamvara*) を催した。 (88)

- 婚選びの儀式が催された時、(そこに) やって来た (以前の) 自分の夫を
今一度夫として選んだ、この愛らしい女性は。 (89)
- 王子は彼女と共に愉しい日々を過ごした。
そして父親が死んだ時 Videha 国の王となった。 (90)
- 沢山の祭式を催して、求め来る人たちに与える事を惜しまなかった。
沢山の男の子にも恵まれて、敵達と戦争をし (て領土を拡大し) た。 (91)
- 正しく国を治めて、大地を守護し、
(そして最後に) 戦場に名誉の戦死を遂げた。 (92)
- すると見目麗しき彼女は、又しても火葬の薪の上なる夫の
後を追って、犠規に従い、進んで以前の如く同じ薪に登った。 (93)
- その後、この王女と共にこの王は
帝釈天の世界を越えて、一切の望みを叶える不滅の世界に到達した。
(94)
- 比類なき天界不滅、極めて得難い (人の羨む理想的) 夫婦関係、
至福¹⁴⁵を、おお、バラモンよ、善業の結果として獲得して。 (95)
- 再生族よ、以上私は異端の者との会話の過失 (*doṣa*) と、
馬祀の最終沐浴の宗教的効能 (*māhātmya*) に就いて語った。 (96)
- それ故に悪しき異端者と会話したり、接触したりする事を止めねばなら
ない。
- 就中、祭式執行時、犠牲祭の初めに聖別された (*dikṣita*) 者は。 (97)
- その人の家で一ヶ月間、祭式が行なわれなかった者を見
てしまったら、心ある者は太陽を見るべきである。 (98)
- 再生族よ、三ヴェーダを全く放棄した様な輩は言わずもがななり。
他人の食物を食べる様な心悪しき者、ヴェーダの教えに背く者共も亦然
り。 (99)
- 異端者¹⁴⁶、不法な業務に従事する者¹⁴⁷、猫の生活信条を持つ者 (猫被

¹⁴⁵ Read *saṃsiddhi* (lec. var.) for *saṃsuddhi*.

¹⁴⁶ Cf. 37* *bhraṣṭaḥ svadharmāt pāṣaṇḍa*

り)¹⁴⁸、詐欺師¹⁴⁹、

懐疑論者¹⁵⁰、青鷲の振舞いなす者 (偽善者)¹⁵¹ を言葉上でも讃えてはならない。 (100)

彼にとって、悪人達との接触も遠ざけられる。

行い悪しき異端者との接触、亦然り。それ故に彼は彼等を避けねばならない。 (101)

(以上)「裸の輩」(*nagna*) に就いて余は汝に説いた。彼等は見ただけでも、祖先祭 (の功德) を無効にする。

彼等と会話すると、人が一日掛けて積んだ功德 (*dina-punya*) も無に帰する。 (102)

彼等異端者は悪しき者共である。賢者は須く彼等と話してはならない。その日一日掛けて積んだ功德 (*punya*) も彼等と会話すれば無に帰してしまう。 (103)

空しく辮髪を結える者、剃髪者 (=似て非なる苦行者)、

妄りに空しく食う者 (*moghāsin*)、全ての浄法から弾き出された者、

お水を供え、祖先へ団子を供える事をしない (先祖を粗末にする) 者共と、会話を交わすだけでも、人は地獄に落ちる。 (104)

上の「夫の死に逢って、彼の火葬の薪の上に登る」貞女物語 (*Sati*) によれば、異端者と会話した王は死んでから、次に人間として生を受けるまで、前後6回の転生を繰返したことになる。

先ず第一に犬、次いで野干、狼、秃鷹、鴉、孔雀と次第するが、この中、前三は四足の動物であり、後三は二本足の鳥である。若しこの輪廻転生の次第に上昇傾向が認められるとするならば、二本足の鳥は四本足の動物よ

¹⁴⁷ *niṣiddha-kṛt*

¹⁴⁸ *pracchannāni ca pāpāni baiḍālaṃ nāma tad-vratam.*

¹⁴⁹ *priyaṃ vakti puro 'nyatra vipriyaṃ kurute bhṛśam tyaktāparādha-ceṣṭas ca śaḥho 'yam kathito budhaiḥ*

¹⁵⁰ *saṃdeha-kṛd dhetubhir yah satkarmasu sa haitukaḥ* Cf. 金倉 361-373

¹⁵¹ Cf. 38* *śaḥho mithyā-vinūtas ca baka-vṛttir udāhṛtaḥ*

り高等となる道理である。動物の中でも犬が最低であり、一方鳥類の中では孔雀が最高となる。この中、鴉 (*kāka*) と孔雀 (*mayūra*) の内、後者が前者より優れている事実は「鳥なき里の鴉」の物語を載せる Jātaka 339 (Bāveru-jātaka) にも見られる¹⁵²。

又「見る」ことによって眼のみならず、その人全体が穢れるとなす考え方は「不可触賤民」(untouchable) 以上の「不可視賤民」(unseeable) のあった事を想わせ (59)、異教徒を見て穢れた眼が、太陽を見る事によって再度清められるという太陽凝視の功德、太陽の浄化力も (98) ここに語られている。

のみならず、貞女がバラモン社会の公序良俗に従って殉死を遂げる時、彼女には前世想起の神通力が賦与され、再生して夫の輪廻転生の様を具に見る事が出来た。そしてこの貞女の献身的愛は、悲惨な運命の下より夫を救い出すに有効であった。貞女を込め、「前世想起」のモチーフは年来筆者の関心事であるが¹⁵³、今はこれ以上触れない。

3. 生盲の由来

生まれながらにして盲目 (*jāty-andha*) であった Dīrghatamas 「長暗」の物語は、もと母胎内が真つ暗であるとする古代インドの信仰を大前提としているが、この母胎内で呪いを受けた者は従って生涯「闇黒」を背負う運命にあった。以下に紹介する所は母胎内に起こった奇想天外の物語で、母親と義弟との姦通を基礎としている。

MBh. 1. 98.

目度度き婦人よ、ジャマッドアグニの息子ラーマは父の殺害に我慢なら

¹⁵² 孔雀は鴉よりも優れている。

*kākenemāms citra-barhān sārdulān kroṣṭukena ca
kr̥iṇīṣva pāṇḍavān rājan mā majjīḥ śoka-sāgare* (MBh. 2. 55. 9)

¹⁵³ Cf. 拙稿 (1977) 683 note 56、金沢. 2003.

ず、
怒って (仇敵) ハイハヤの王アルジュナを撃ち、彼の千の腕を斬り捨てた。 (1)

更に弓を取り、強大な矢を放って
戦車を駆り、大地を征服せんと一度ならずクシャトリヤを殲滅した。 (2)

この様にして以前偉大なブリグの後裔は、各種の飛道具によって
この地上よりクシャトリヤを一掃する事、21 回に及んだ。 (3)¹⁵⁴

その後、全ての武士族 (クシャトリヤ) の夫人達は、挙って
自制心あるバラモン男子と交わって子孫を儲けることとなった。 (4)

「息子は夫に属す」とはヴェーダ聖典の規定する所である。
彼女達はこの掟を拳拳服膺して、バラモンの男達と交わった。
武士族 (クシャトリヤ) の再生はこの様にして行なわれたのであり、
それは人々の知る所でもある。 (5)¹⁵⁵

その昔、ウタティヤという賢明な仙人がいた。
彼に妻あり、その名をママターといい、大変大事にされていた。 (6)
ところがウタティヤには弟があり、彼は神々の司祭僧、

¹⁵⁴ 武士 Hehaya 家と聖職者 Bhārgava 家は古来親密で、後者は前者の purohita を勤めていた。その後、バラモン家は裕福となり、一方武家は衰えたから後者は前者に金銀を乞うたが、拒絶に会った。武家は怨んで追跡したが、僧家は自分の庵に財を埋めて逃亡した。その後、久しくして武家に Kārtavīryārjuna、僧家に Jamadagni が出で、前者はバラモン Dattātreya を悦ばせて千金を得て高慢となった。彼が或る日 Jamadagni の庵に在って歓待を受けた時、彼はその所有する如意牛 Suśīlā を千金にかえても手に入れたいと欲したが拒絶されたので、大臣 Candragupta を遣わし、力づくでもそれを奪おうとした。しかし又しても僧に妨げられたので、彼は怒って僧を殺害した。妻 Reṇukā が、その胸を 21 回叩いて悲しんでいるのを見た息子 Paraśurāma は、弟子の Akṛtavraṇa と共に武家への復讐を誓ったと言われる。

¹⁵⁵ 1035* 他の伝承は以下の数行を含んでいる。

そしてその時、クシャトリヤは再生したのである。そこで私はこの昔物語を話そうと思うのだ。

ブリハスパティといい精力絶倫、彼は(兄嫁)ママターに言寄った。

(7)

併しママターはとりわけ口説き上手な (*vadatām vara*)¹⁵⁶ この義弟に、
「自分は貴方の兄さんの胤を宿して妊娠していますから、止めて下さい」と言った。

(8)

「福德豊かなブリハスパティ様、これなるウタティヤの子は、
私のお腹の中でもうヴェーダ(聖典)を六つの補助学共々修得しました。

(9)

その上、貴方の精は殊の外強く、女を懐妊せずには措きません (*amogha-retas*)。

事情かくのごとくですから、どうか今は諦めて下さいまし」

(10)

この様に理を通して彼女に言われても、文字通り精力絶倫なる (*brhat-tejas*)

ブリハスパティはその時、自ら性欲を抑える事が出来なかった。

(11)

そしてとうとう、愛欲の塊である彼は、嫌がる彼女と交わってしまった。

すると射精寸前の彼に対して、胎内の児は彼に次の様に言った。

(12)

「おお、いとも小さき者よ、俺は敢えて言うがここに二人は何としても無理だ。

貴方は又、精力殊の外強く、女を懐妊せずには措かない (*amogha-sukra*)。

でも、この俺の方がここでは先着だ」

(13)¹⁵⁷

¹⁵⁶ 文字通り「弁舌者の中の最たる者」の義であるが、祭官として「誦唱者の中の最たる者」と取る事も可能である。

¹⁵⁷ 1036* 他の伝承は以下の数行を含んでいる。

「精力殊の外強く、女を懐妊せずには措かぬ貴方は、どうか(母様を)苦しめないで下さい」

胎内に居る彼のこの言葉を無視して、ブリハスパティは何として交わりたいと、見目麗しきママターに迫った。

程経て射精を悟るや、彼女の胎内に居た仙人は、両足でブリハスパティの精液の行く手を遮った。

すると妨害されて目的地に到達し得なかった彼の精液は、その時直ちに地面に落ちてしまった。するとブリハスパティは怒って。

するとこの様に言われた聖なる仙人ブリハスパティは、
怒って胎内に居たウタティヤの息子を威嚇しながら、次の様に呪った。
(14)

「時もあるうに、お前は一切生類が望むこの時に、
こんな事を口走ったから、長い闇に入る事となろう。」 (15)

斯くの如くしてこの令名高きブリハスパティの呪いの故に、長闇という
名の仙人が誕生したのであるが、
彼もまた、精力にかけてはブリハスパティに引けを取らなかった。
(16)¹⁵⁸

名声赫々たる彼はその後、ガウタマ以下の息子を産んだ。
そして、仙人ウタティヤ家は、子々孫々にわたり繁栄する事となった。
(17)¹⁵⁹

貪欲と迷妄に負けたガウタマ以下のこれら息子達は、
共々、彼を木の小箱に詰めてガンジス川に流してしまった。 (18)

「この盲目の老人は、この先扶養するに値しない」と考えて、
彼等は残酷にも、そのまま家に帰ってしまった。 (19)

一方、王よ、この盲目の仙人は流れのまにまに、

¹⁵⁸ 1037* 他の伝承は以下の二行を含んでいる。

生来盲目の (*jāty-andha*)、賢明にしてヴェーダを知る彼は、自分の学 (*sva-vidyā*) により、
美貌をそなえた若きバラモン女、プラドヴェーシー (大嫌い) と名付ける女を娶った。

¹⁵⁹ 1038* 他の伝承は以下の8行を含んでいる。

有徳にして偉大、ヴェーダとその補助学に通達せるこの賢者は、
スラビの後裔から (人目を憚らず性行為を為す) 「牝牛の道 (*go-dharma*)」を修得した後、
欲望に任せて (*śraddhāvat*)、何一つ躊躇する所なくそれを実行に移した。
彼の不穏当な行為を見て勝れた賢者達 (=ガウタマ以下の子供達)、
その庵に住んでいた彼等は、皆悉く怒り且つは当惑して、
「ああ、こんな常軌を逸した行為をする者は庵に住むに値しない、
それ故我等は皆でこの悪性の男を追放しよう」と互に相談し合って、彼等は賢者デ
イールガタマス、

小箱に揺られながらあちこち、多くの土地を經巡った。(20)

さて、ここにバリと名付ける、一切の人倫の道に通じた王あり、
偶々沐浴の折、流れのまにまに岸近くにやって来た彼を見た。おお雄牛
の如き王よ。(21)

有徳にして、その勇氣空しからざるバリは彼を救い上げ、
事の仔細を知った後、彼は息子を得んと、願い事を選んだ。(22)¹⁶⁰

「勝れたお方よ、子孫存続の為に、どうか私の妻達と交わって、
人の道と利の道に聡い息子を沢山拵えて下さいませんか」(23)
彼がこの様に言った時、かの精力絶倫なる仙人は「畏まりました」と承
諾した。

それで王は自分のお妃であるスデーシュナーを彼の許に遣わした。(24)
ところがかの王妃は「こんな盲目の老人なんか」と思って彼の所へ行か
ないで、

その替りに自分の小間使いを、この老人の許に遣わしたのであった。
(25)

仙人は思い通りにこの奴隷女の胎に、カクシーヴァト以下
11人の息子を、義務を貴しとなして、拵えたのである。(26)

カクシーヴァト以下のこれらの息子が勉強に励んでいるのを見て
氣力充実せる王はかの仙人に「彼等は(まさしく)俺の息子だ」と言っ
た。(27)¹⁶¹

「いやはや、とんでもない」と偉大なる仙人は彼に言った。

「この子達は確かに私のものだが、カクシーヴァト以下、
これらの男の子は私と奴隷女の間に生れたものである。(28)

盲目でしかも老人だと思って貴方の王妃スデーシュナーは私を輕蔑して、

¹⁶⁰ 他の伝承は以下の一行を含んでいる。

客人の礼を済ませてからこの王仙(バリ)は、疲れも癒えたこの賢者に次の様に言
った。

¹⁶¹ 1041* 他の伝承は上の二行の間に以下の一行を含んでいる。

バリ王はこれらカクシーヴァトを初めとするこれらの男の子を見て、すっかり喜ん
で、

愚かにも小間使いの奴隷女を（自分の代わりに）私のもとに寄こしたのであるから」と述べた。(29)

するとバリ王はこの勝れた仙人に謝って、何とか機嫌を取り結んで、お妃スデーシュナーを今一度彼の許に遣わした。(30)

「長閨」(仙人) は彼女の身体各部を愛撫して、彼女に言った。「貴女は約束を守る、気力ある一人の男子を授かるでしょう」(31)

するとスデーシュナーはアンガと言う名の王仙を産んだ。この様にして地上には、その他諸々の弓矢の道に長けた武人(クシャトリヤ) がバラモンの男を介して

誕生したのである。彼等は深く人倫の道を究め、気力充実、大力無双であった。

この話をお聞きの上は母上、どうか貴女のお好きな様になさいます。(32-33)

この *Dirghatamas* の物語は、叙事詩に在って、*Hari* 称名の功德を説く全く別の文脈に於いて今一度繰返される。以下に該当部分のみ邦訳を試みる。

MBh. 12. 328. 43-51

世界を熱する太陽、更に火とソーマ、
(凡そこの世に) 光り輝くものは我が諸部分に他ならず、我が毛髪 (*keśa*) と称せられる。

それ故に再生族の最たる全知者達は、余を *Keśava* と呼ぶ。(43)
ウタティヤと称する偉大なバラモンは、自分の妻(の胎)に胤を降ろした。

その後、ウタティヤが神の幻力により己が姿を消した時、
(弟の) ブリハスパティは、その彼の妻を見つけた。(44)

すると性交を望んで近付いたこの優れた仙人に対して、
その時既に五大所成となつ(て既に人間の形をなしてい) たかの胎児は言
った。(45)

「願い事を叶えるお方よ、余は先着なり、我が母を悩まし給う莫れ」と。
ブリハすパティはこの言葉を聞くと怒り、そして彼を呪った。 (46)

「汝は性交を望んで来れる我を拒否すれば、
我が呪いにより必ず盲となって誕生せん」と。 (47)

彼はこの優れた仙人の呪いにより長い闇黒に入った。

蓋し、以前この仙人は Dīrghatamas とする名前であったのである。 (48)

併し彼は世に永遠なる四つのヴェーダを、その補助学各種と共に修めて
後、

この我が秘密の名前を祈念した。 (49)

伝来の仕方で Keśava というこの名を何回も何回も。

その結果、彼は視力を回復し、その後は Gautama とする名前を得た。 (50)

この様に Keśava とする私の名は、アルジュナよ、願い事を叶える。

全ての神々、又偉大なる聖仙にとっても。 (51)

この文脈では Bṛhaspati の呪いを受けた聖者が生れながらにして盲目の Dīrghatamas であり、彼は Hari 称名の結果、視力を回復したと言われる。視力回復の後、同一人が Gautama と呼ばれる様になったとも伝えている。

母胎内で聖者の呪を蒙った者が生盲となる事実は、もと母胎内が真つ暗であった事を前提としているが、「母胎内闇黒」の概念は他の文献にも知られている。今若干の例を示せば、以下の如くである。

yadāyaṃ puruṣo mātur udare...ity evaṃ advārake andhatamasī...

(Pāśupata sūtra with comm. 141. 17-20)

nityāndhakāre garbhe vasatīm (Viṣṇusmṛti 96. 30)

(udarabhāge...yonau) /andhakāre ca mahatīm pīḍāṃ vindati mānavah

(Agni Purāna 369. 23)

「内如糞厠黒闇臭穢可惡坑中」(大正 11. 331a2, 24. 256a29)、「内如糞坑最極
猥賤雜穢充塞。黒闇所居無量千虫之所依止」(大正 29. 48a2-3)。¹⁶²

Abbreviations and Texts

- MBh. : The Mahābhārata (Poona Critical Edition).
 Mhv : Le Mahāvastu, ed., É. Senart (Tokyo Reprint 1977).
 MS. : Manusmṛti (NSP. 1946).
 NS. : The Nāradaśmṛti ed., by R. W. Lariviere (Philadelphia 1989).
 NSP. : The Nirṇayasagar Press (Bombay).
 R. : The Vālmīki-Rāmāyaṇa (Baroda Critical Edition).
 VP. : Viṣṇupurāṇam (Baroda Critical Edition).
 VS. : Viṣṇusmṛti, The Adyar Library Series 93 (Adyar 1964).
 YS. : Yājñavalkyaśmṛti (NSP. 1949).
 大正 : 大正新修大藏經.

Avadānakalpalatā : Text edited by P. L. Vaidya (Buddhist Sanskrit Texts
22) (Darbhanga 1959).

Lalitavistara : The text edited by S. Lefmann (Halle 1902).

Bibliography

- Gnoli : R. Gnoli, The Gilgit Manuscript of the Sanghabhedavastu,
Part 2 (Roma 1978).
 Handurukande : R. Handurukande, Maṇicūḍāvādāna (PTS. London 1967).
 Hara : M. Hara, "A Note on the Buddha's Asceticism," Festschrift H.
Bechert, (Indica et Tibetica 30) (1997) 249-260.
 Hopkins : E. W. Hopkins, "The Oath in Hindu Epic Literature," Journal
of the American Oriental Society 52 (1932) 316-337.
 Kane : P. V. Kane, History of Dharmaśāstra III (Poona 1973).
 Lamotte : E. Lamotte, Le Traité de la grande vertu de Sagesse II

¹⁶² Cf. also 拙稿 (1977) 668-9, 671-3.

- (Louvain 1949).
- Lariviere : R. W. Lariviere, *The Divyatattva of Raghunandana Bhaṭṭācārya* (New Delhi 1981).
- Lienhard : S. Lienhard, *Mañicūḍāvadānoddhṛta, A Buddhist Re-birth Story in the Nevari Language* (Stockholm 1963).
- Lüders : H. Lüders, "Der indische Eid" in *Varuṇa II* (Göttingen 1959) 655-670.
- Mette : A. Mette, "Ein Gilgit-Fragmennt des Padmāvati-avadāna," in *Zur Schulgehörigkeit von Werken der Hīnayāna-Literatur* (Göttingen 1985) 225-238.
- Peri : N. Peri, "Les Femmes de Śākya-muni," *Bulletin de l'École Française d'extrême-orient* 18-2 (Hanoi 1918) 1-37.
- Thomas : E. J. Thomas, *The Life of Buddha, as Legend and History* (London 1975).
- 金倉 : 金倉円照「ハイツカとヘーツカ」*インド哲学仏教学研究* [III] (春秋社 1976) 361-372.
- 金沢 : 金沢篤「前世想起と解脱—知行併合論の哲学的基礎 IV—」*駒沢大学仏教学部研究紀要* 61 (2003) 489-471 頁.
- 木村、平等 : 木村泰賢、平等通昭「佛伝文学の研究」(岩波書店 1930).
- 黒部 : 黒部通善「日本佛伝文学の研究」(和泉書院 1988).
- 原 (1972) : 原実「古典インドの運命観」*東大文学部研究報告* 4 (1972) 1-319.
- (1977) : 「生苦」玉城康四郎博士還暦記念論集 (春秋社 1977) 667-683.
- (1986) : 「インドの日輪神話」*東方* 2 (1986) 92-111.
- (2004) : 「Vinaya 研究」*国際仏教学大学院大学紀要* 7 (2004) 270-217.
- 引田 : 引田弘道「パドマーヴァティー物語」*愛知学院大学文学部紀要* 33 (2003) 91-102.

- 中村 ：中村元「ゴータマ　ブッダ」（春秋社 1992）.
並川 ：並川孝儀「ラーフラ（羅睺羅）の命名と釈尊の出家」仏教
 大学総合研究所紀要 4（1997） 17-34.
野村 ：野村育代「仏教と女性の精神史」（吉川弘文館 2003）.
水谷 ：水谷真成訳「大唐西域記」中国古典文学大系 22（平凡社
 1971）.

Summary

Women in Ancient India (IV)

Minoru Hara

Three topics, of uneven length, are discussed in this paper:

(1) The way women can prove their chastity when suspected of infidelity.

Two cases are presented:

(1-1) Sītā

I translate Vālmiki's *Rāmāyana* 6.102-106 into Japanese. In this fragment, Rāma, who fears public rumour (*janāpavāda*), rejects Sītā after recovering her from her confinement in the Laṅkā Island. In spite of her piteous protest, Rāma does not accept her, and as human means (*mānuṣa-pramāṇa*) fail to prove her innocence, Sītā resorts to divine means, i.e. ordeal (*daivika-pramāṇa*). She invokes Agni, the fire god, and steps into it. Agni, however, does not burn her and thus testifies to her chastity.

(1-2) Yaśodharā

Yaśodharā, one of Śākyamuni's wives (the other two being Gupikā and Mṛgī), was doubted of her lack of chastity because she conceived just before the Buddha's departure from the palace and delivered on the same day of his awakening—the well-known story of Rāhu's six-year stay in his mother's womb. According to several *sūtras* preserved in Chinese translation, Śuddhodana, her father-in-law, and other people accused her of being unchaste and sentenced her to death. Yaśodharā (in some variants, together with Rāhu) was thrown into fire, but the fire turned into a pond, which proved her chastity. In another narrative version, she herself threw Rāhu, tied to a stone,

into a pond in order to prove that he was a legitimate son. Water did not let Rāhu sink, and this testified to Yaśodharā's chastity. I translate and discuss six Chinese *sūtras* describing the fire-ordeal and seven texts containing the water-ordeal, alongside their Sanskrit equivalents.

Compared to the ordeal (*divya*) prescribed in later Smṛti literature, these narratives are simple and closely related to *śapatha* and *satya-vacana*.

(2) *Jāti-smaraṇa* (The miraculous power of a chaste woman)

I offer a Japanese translation of *Viṣṇu-purāṇa* 3.18.53-104. This is a story of a king who undergoes bad re-births because of his talking to a heretic (*pāśanda*). His queen, however, refuses to speak with the heretic and does not even look at him, keeping instead her eyes on the Sun. Even after her death as a *sati*, she continues to be faithful to the king and retains his memory. Because of her chastity, she is able to find her husband six times in various forms (dog, jackal, etc.) until she is finally united with him.

(3) The story of Dīrghatamas

I translate *Mahābhārata* 1.98 and 12.328.43-51 into Japanese. The lustful sage Bṛhaspati seduced Mamatā, (the wife of Utathya, Bṛhaspati's own brother), and unites with her against her will. As Mamatā was already pregnant with Dīrghatamas, the latter notices Bṛhaspati's penis entering his mother's womb and kicks it out saying there is no room for his *tejas* or *retas*. Discovering that his semen was wasted and fell on earth, Bṛhaspaiti becomes angry and curses Dīrghatamas to be born blind (*jāty-andha*). (The story seems to presuppose complete darkness in the womb.)

Professor,

International College

for Postgraduate Buddhist Studies